



# DevPartner

---

## エラー検出ガイド

リリース 10.1.0

**Copyright © 2010 Micro Focus (IP) Ltd.  
All rights reserved.**

Micro Focus (IP) Ltd. は、本書の作成にあたり、適切かつ正確であるよう最大限の努力を払っていますが、いかなるときも独自の判断で予告なく変更を行う権利を保有します。本書に記載のソフトウェアはライセンスに基づき提供されており、当該ライセンスの条件に従う場合のみ使用または複製できます。また、とりわけ Micro Focus ソフトウェア製品の特定用途への適合性に対する保証は明確に除外されており、Micro Focus はいかなる場合も、いかなる間接的損失に対する責任も負わないものとします。

Animator®、COBOLWorkbench®、EnterpriseLink®、Mainframe Express®、Micro Focus®、Net Express®、REQL® および Revolve® は、登録商標です。AAI™、Analyzer™、Application Quality Workbench™、Application Server™、Application to Application Interface™、AddPack™、AppTrack™、AssetMiner™、BoundsChecker™、CARSTM、CCITM、DataConnect™、DevPartner™、DevPartnerDB™、DevPartner Fault Simulator™、DevPartner SecurityChecker™、Dialog System™、Driver:Studio™、Enterprise Server™、Enterprise View™、EuroSmart™、FixPack™、LEVEL II COBOL™、License Server™、Mainframe Access™、Mainframe Manager™、Micro Focus COBOL™、Micro Focus Studio™、Micro Focus Server™、Object COBOL™、OpenESQL™、OptimalAdvisor™、Optimal Trace™、Personal COBOL™、Professional COBOL™、QACenter™、QADirector™、QALoad™、QARun™、Quality Maturity Model™、Server Express™、SmartFind™、SmartFind Plus™、SmartFix™、SoftICE™、SourceConnect™、SupportLine™、TestPartner™、Toolbox™、TrackRecord™、WebCheck™、WebSync™、および Xilerator™ は、Micro Focus (IP) Ltd. の商標です。その他の商標はすべてそれぞれ所有する国の財産です。

Micro Focus (IP) Ltd の書面による事前の許可なく、CD-ROM に収録されているソフトウェア製品のユーザー マニュアルを除く、本発行物のいかなる部分も、あらゆる電子媒体または機械による読み取り可能な形式に複製、複写、再現、送信、転写、または還元してはなりません。変更された Apache Software Foundation ソース ファイルにアクセスする場合は、Micro Focus 担当員にお問い合わせください。

ライセンス保持者は、CD-ROM に収録されているソフトウェア製品のユーザー マニュアルを複製できますが、ライセンス契約に基づいて許可されたソフトウェアへのユーザー アクセスに対応する程度の複製に限定されます。部分的または全体を問わず、本マニュアルを再現する場合は、著作権表示全体がそのままの状態で作成されていなければなりません。

アメリカ合衆国政府の限定権利。本ソフトウェアおよび本マニュアルは自費で開発され、そのいかなる部分も公有財産ではなく、かつこれらは、Federal Acquisition Regulations (連邦調達規則) およびそれらに対する担当局の付録に基づく限定権利を有する Commercial Computer Software (商用コンピュータソフトウェア) であると認識するものとします。アメリカ合衆国政府による使用、複製、または開示に関しては、The Rights in Technical Data の副段落(c)(1)(ii)、DFAR 252.227-7013 の Computer Software の条項、または FAR 52.227-19 の Commercial Computer Software Restricted Rights の副段落(c)(1)および(2)に規定された制約が適宜適用されます。契約者は Micro Focus (IP) Ltd.、9420 Key West Avenue、Rockville、Maryland 20850 です。ソフトウェアの未発表部分については、アメリカ合衆国著作権法に従って権利が保護されます。

20101201170455

# 目次

はじめに .....	7
対象読者 .....	7
このマニュアルの内容 .....	7
表記方法 .....	8
困った時には .....	8
お問い合わせ先 .....	9
<b>第1章・ワークフローと構成設定 .....</b>	<b>11</b>
DevPartner エラー検出ワークフロー .....	11
DevPartner エラー検出ワークフローの利点 .....	12
エラー検出設定を保存する .....	12
コマンドラインからエラー検出を使用する .....	12
アンマネージ (ネイティブ) C++ プロジェクトを NMDEVENV でコンパイル、 インストゥルメント、およびビルドする .....	14
nmvcbuild を使用してネイティブ C/C++ コードをインストゥルメントする .....	14
DevPartner エラー検出設定をカスタマイズする .....	15
全般 .....	16
データ収集 .....	16
API コール レポートティング .....	17
コールバリデーション .....	17
COM コール レポートティング .....	17
COM オブジェクトの追跡 .....	17
デッドロック分析 .....	18
メモリの追跡 .....	18
.NET コール レポートティング .....	19
.NET 分析 .....	19
リソースの追跡 .....	20
モジュールとファイル .....	20
フォントと色 .....	20
構成ファイル管理 .....	20
<b>第2章・プログラムのチェックおよび分析 .....</b>	<b>23</b>
エラー検出タスク .....	23
リークを検索する .....	23
ポインタ エラーとメモリ エラーを検索する .....	23
メモリ破壊を検索する .....	24
.NET アプリケーションでのレガシー コードへの移行を分析する .....	24
Win32 API コールを検証する .....	25
アプリケーションのデッドロックを検索する .....	26
DevPartner エラー検出の拡張使用 .....	26
複雑なアプリケーションを理解する .....	26
リバース エンジニアリング .....	28
ストレス テスト .....	30

<b>第3章・複雑なアプリケーションの分析</b> .....	<b>33</b>
複雑なアプリケーションについて .....	33
プロセスを待機 .....	34
プログラムの限定的な部分を分析する .....	34
[モジュールとファイル]設定の使用 .....	36
監視対象を決定する .....	38
アプリケーションの起動方法 .....	39
サービスを分析する .....	39
要件とガイドライン .....	39
サービスを分析する .....	40
タイミングの問題と dwWait .....	40
代替方式：ワーカー スレッドからのコントロール ロジックの分離 .....	40
DevPartner エラー検出ログのオンとオフを切り替えるカスタム コード .....	40
共通のサービス関連の問題 .....	40
テスト コンテナを使用して ActiveX コントロールを分析する .....	41
一般的なテスト コンテナの問題 .....	42
COM を使用するアプリケーションを分析する .....	43
一般的な COM の問題 .....	44
IIS 5.0 の ISAPI フィルタを分析する .....	45
一般的な ISAPI フィルタの問題 .....	46
IIS 6.0 の ISAPI フィルタを分析する .....	46
IIS 5.0 プロセス分離モード .....	47
IIS 6.0 デフォルト構成 .....	48
一般的な IIS 6.0 ISAPI フィルタの問題 .....	48
よく寄せられる質問 (FAQ) .....	49
<b>第4章・ユーザーが作成したアロケータの使用</b> .....	<b>51</b>
概要 .....	51
必要な情報を収集する .....	51
ユーザーが作成したアロケータの名前を検索する .....	51
ユーザー作成のアロケータによるメモリに関する特殊な前提 .....	53
UserAllocators.dat でエントリを作成する .....	54
モジュール .....	54
アロケータ レコード .....	55
デアロケータ レコード .....	59
QuerySize レコード .....	61
リアロケータ レコード .....	64
Ignore レコード .....	67
UserAllocator フック要求をコーディングする .....	69
UserAllocators に関するコード要件 .....	70
アロケータ関数フック .....	70
デアロケータ関数フック .....	71
リアロケータ関数フック .....	71
UserAllocator フックをデバッグする .....	72
NoDisplay .....	72
Debug .....	72
UserAllocators.dat でエラーを診断する方法 .....	73
トークン解析エラー .....	73
意味的エラー .....	73
UserAllocators.dat の変更後にアプリケーションが不安定になる場合 .....	74

<b>第5章・デッドロック分析</b> .....	<b>75</b>
バックグラウンド：シングル スレッド アプリケーションとマルチスレッド アプリケーション .....	75
スレッド .....	75
クリティカル セクション .....	76
デッドロッカー基本定義 .....	76
デッドロックを回避する方法 .....	77
潜在的なデッドロック .....	77
Dining Philosophers（食事をする哲学者） .....	78
同期オブジェクトの監視 .....	79
その他の同期オブジェクト .....	79
追加情報 .....	80
MSDN リファレンス .....	80
その他の参照 .....	81
<b>付録 A・エラー検出のトラブルシューティング</b> .....	<b>83</b>
トラブルシューティング .....	83
<b>付録 B・重要なエラー検出ファイル</b> .....	<b>93</b>
ファイルとその用途 .....	93
<b>索引</b> .....	<b>95</b>



# はじめに

このマニュアルでは、Micro Focus® DevPartner エラー検出の使用方法を深く理解するためのコンセプトと手順について説明します。

## 対象読者

このマニュアルは、この製品を新規に使用する DevPartner エラー検出のユーザー、および新しい機能とインターフェイスの変更の概要について確認する DevPartner エラー検出の以前のバージョンのユーザーを対象としています。

新しいユーザーは、『DevPartner Studio ユーザーズ ガイド』のエラー検出に関する章を参照して DevPartner エラー検出のコンセプトの概要を理解してから、このマニュアルで DevPartner エラー検出を最も効果的に使用する方法を学習してください。

以前のバージョンの DevPartner Studio のユーザーは、リリース ノートを参照して、DevPartner エラー検出と BoundsChecker (以前のバージョンに付属のエラー検出ツール) の違いを確認してください。

このマニュアルでは、ユーザーが Windows インターフェイスおよびソフトウェア開発のコンセプトに精通していることを前提としています。

## このマニュアルの内容

このマニュアルには、以下の章および付録が含まれています。

- ◆ 第1章「ワークフローと構成設定」では、DevPartner エラー検出を設定して、単純な API コールバリデーションから複雑な COM アプリケーションで発生する問題までのさまざまな問題を解決する方法について説明します。
- ◆ 第2章「プログラムのチェックおよび分析」では、DevPartner エラー検出で実行できるエラー検出タスクと、エラー検出以外のその他のタスクについて説明します。
- ◆ 第3章「複雑なアプリケーションの分析」では、複雑なアプリケーションをチェックするときに DevPartner エラー検出をより効果的に使用する方法について説明します。
- ◆ 第4章「ユーザーが作成したアロケータの使用」では、独自のメモリ アロケータを分析できるように UserAllocators.dat ファイルをカスタマイズする方法について説明します。
- ◆ 第5章「デッドロック分析」では、デッドロック、潜在的なデッドロック、および同期オブジェクトについて説明します。この章では、これらのトピックに関する詳細情報を提供する Web アドレスと書籍も紹介します。
- ◆ 付録 A「エラー検出のトラブルシューティング」では、問題／解決法の形式でいくつかの最も一般的な問題の回答を示します。

- ◆ 付録B「重要なエラー検出ファイル」では、DevPartnerエラー検出に関連付けられた重要なファイルのリストを示し、各ファイルの目的について説明します。

また、このマニュアルの最後には索引があります。

**メモ：** このマニュアルには、DevPartner StudioのすべてのVisual Studioバージョンに関する情報が含まれています。テキスト内の「メモ」では、特定のリリースのVisual Studioでのみ使用可能な機能が特定されています。

## 表記方法

このマニュアルの表記方法は以下のとおりです。

- ◆ スクリーン コマンドやメニュー名などは、`[ ]`で囲んで示します。以下に例を示します。  
[ツール]メニューから[オプション]を選択します。
- ◆ コンピュータのコマンドやファイル名などは、等幅フォントで示します。以下に例を示します。  
『DevPartner エラー検出ユーザー ガイド』(bc\_vc.pdf) で説明します。
- ◆ コンピュータのコマンドとファイル名内の変数（ユーザーがインストール時に適切な値を指定するもの）は、イタリックの等幅フォントで示します。以下に例を示します。  
[移動先]フィールドに「`http://servername/cgi-win/itemview.dll`」と入力します。

## 困った時には

何らかの問題が発生したり、さらに詳しい技術情報やアドバイスが必要な場合は、入手方法がいくつか用意されています。ご使用の国によっては、保守契約を締結されているお客様しかMicro Focusの製品サポートが受けられない場合があります。

本製品をMicro Focusから直接購入されたお客様は、下記までお問い合わせください。正規販売店などから購入されたお客様は、まず購入元にお問い合わせください。代理店で対応できない場合は、下記までお問い合わせください。

なお、お問い合わせの際には以下の情報をご用意いただけますようお願いいたします。ご用意いただける情報が多いほど、より適切な製品サポートを受けることができます。すべての内容に回答できない場合や、発生している問題に該当しないと思われる内容については、お持ちの情報をすべてご提示ください。

- ◆ 製品の名前、リリース（バージョン）、およびビルド番号。
- ◆ 製品がローカル データベースまたはネットワーク データベースを使用しているかどうか、製品がデフォルト フォルダにインストールされているかどうか、製品がスタンドアロン インストールまたはネットワーク インストールかどうか、製品がクライアント インストールまたはサーバー インストールかどうかなど、インストール オプションを含むインストール情報。
- ◆ オペレーティング システム、製品がインストールされているリリース、メモリ、ハードウェア/ネットワーク仕様、実行中だった他のアプリケーションの名前およびリリースなどの環境情報。

- ◆ ソフトウェア製品において問題が発生した箇所、および問題発生前に実行した操作。
- ◆ 製品の正確なエラー メッセージ（ある場合）。
- ◆ アプリケーション、ライセンス、またはオペレーティング システムの正確なエラー メッセージ（表示された場合）。
- ◆ お客様の Micro Focus クライアント、オフィス、またはサイト番号（該当する場合）。

## お問い合わせ先

当社の Web サイトには、お問い合わせ先電話番号と住所に関する最新情報が掲載されています。製品サポート ページには、WebSync サービスなど膨大な情報が掲載されており、修正プログラムおよびマニュアル アップデートをダウンロードすることができます。お問い合わせの際は、ご使用のブラウザに [www.microfocus.com](http://www.microfocus.com) と入力し、Micro Focus ホーム ページを表示します。

Micro Focus Product Support のお客様については、お問い合わせに関する情報については『製品サポート ハンドブック』を参照してください。『製品サポート ハンドブック』は当社 Web サイトからダウンロードするか、販売担当員に印刷版をご依頼ください。保守契約を締結されているお客様しか Micro Focus の製品サポートが受けられない場合があります。

はじめに

## 第1章

# ワークフローと構成設定

DevPartner エラー検出では、さまざまなタイプの問題を特定できます。DevPartner エラー検出のデフォルト設定では、パフォーマンスへの影響を最小限に抑えて発生頻度の高いエラーを検出するよう設定されています。

特定のタイプの問題を検索するために、この設定を変更して DevPartner エラー検出を微調整できます。エラー検出設定を理解すると、DevPartner エラー検出を最大限に活用できます。

この章では、DevPartner エラー検出を設定して、単純な API コールバリデーションから複雑な COM アプリケーションで発生する問題までのさまざまな問題を解決する方法について説明します。

**メモ：** エラー検出では、ターゲット アプリケーションごとにデータ ファイルが作成されます。エラー検出を開始する前に、ターゲット実行ファイルを含むディレクトリへの書き込みアクセス権があることを確認する必要があります。

## DevPartner エラー検出ワークフロー

DevPartner エラー検出は、以前のバージョンの DevPartner エラー検出のワークフローよりも広範なプログラム ワークフローに従います。このメカニズムを使用すると、収集およびレポートされるデータ量を制御できます。

DevPartner エラー検出ワークフローには以下の4つのステップがあります。

- 1 必要なデータを収集するように DevPartner エラー検出を設定します。
  - a 収集するデータのタイプを選択します。
  - b 監視対象のアプリケーションの部分を定義します。
  - c 適用する **[抑制]** と **[フィルタ]** を選択します。
- 2 アプリケーションを実行します。
  - a プログラムの実行時に、**[検出されたプログラム エラー]** ダイアログ ボックスに表示されるエラーを確認します。
  - b 有効でないエラーを抑制します。
  - c ログを表示し、必要に応じてフィルタを作成します。
  - d メモリとリソースの使用状況を確認します。
- 3 データを表示します (プログラムの終了後)。
  - a ログに表示しないイベントをフィルタします。
  - b アプリケーションを今後実行するときに適用する新しい抑制を作成します。
- 4 必要に応じて、今後使用するために設定、抑制、フィルタを保存します。

## DevPartner エラー検出ワークフローの利点

DevPartner エラー検出ワークフローでは、以下のことができます。

- ◆ 収集するデータのタイプと量の選択
- ◆ 監視対象のアプリケーションの部分の選択
- ◆ 既知の問題をレポートするエラー、条件付きコードによって処理されるエラー、サードパーティ コードで生成されるエラーの抑制
- ◆ ログ内の無関係な情報を非表示にするフィルタの作成
- ◆ 設定、抑制、フィルタを再利用するためのさまざまな構成の保存

DevPartner エラー検出では、ワークフロー プロセスのステップごとにデフォルトが用意されています。つまり、DevPartner エラー検出をデフォルト設定で使用することも、設定を変更して DevPartner エラー検出でのアプリケーションの分析方法をカスタマイズすることもできます。

## エラー検出設定を保存する

エラー検出設定（特定の設定の組み合わせ（スタンドアロン バージョン）またはオプション（Visual Studio））を保存して、再利用できます。

たとえば、メモリ リークとリソース リーク用の設定、COM リーク用の別の設定、詳細な **lint** タイプの分析を行うためのさらに別の設定を作成できます。より精密な設定を行い、大規模なアプリケーションの特定のセクションのみを調べる設定を定義できます。

## コマンド ラインからエラー検出を使用する

**BC.exe**（実行可能ファイル）でプログラムをチェックするには、コマンド プロンプトから以下のコマンド構文を使用します。[ ] で囲んだコマンドはオプションです。

```
BC.exe [/?]
```

```
BC.exe sessionlog.DPbcl
```

```
BC.exe [/B sessionlog.DPbcl] [/C configfile.DPbcc] [/M] [/NOLOGO]
[/X[S|D] xmlfile.xml] [/OUT errorfile.txt] [/S] [/W workingdir]
target.exe [target args]
```

表 1-1. コマンド ライン オプション

オプション	説明
/?	使用状況を表示します。
sessionlog.DPbcl	既存のセッション ログを開きます。
/B sessionlog.DPbcl	バッチ モードで実行して、セッション ログをログ ファイルの sessionlog.DPbcl に保存します。
/C configfile.DPbcc	<b>configfile.DPbcc</b> オプションを使用します。
/M	<b>BC.exe</b> を起動し、実行中は最小化します。

表1-1. コマンド ライン オプション

オプション	説明
/NOLOGO	<b>BC.exe</b> のロード中にスプラッシュ画面を表示しないようにします。
/X xmlfile.xml	XML 出力を生成して指定されたファイルに保存します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>実行ファイルを指定した場合は、エラー検出によって、その実行ファイル上のセッションが実行され、その結果からXML出力が生成されます。</li> <li>セッション ログ ファイル (<b>sessionlog.DPbc1</b>) だけを指定した場合は、エラー検出によって、指定したセッション ログがXMLに変換され、その出力が保存されます。</li> </ul> <b>メモ：</b> 実行ファイルを指定した場合は、/B スイッチを使用して対応するセッション ログ ファイルも指定する必要があります。
/XS xmlfile.xml	/X フラグと S 修飾子を一緒に使用すると、サマリ データだけがXML ファイルに保存されます。エラー検出セッションの実行に関する情報 (セッション データ) はすべてエクスポートされます。
/XD xmlfile.xml	/X フラグと D 修飾子を一緒に使用すると、詳細データだけがXML ファイルに保存されます。エラー検出セッションの実行に関する情報 (セッション データ) はすべてエクスポートされます。
/OUT errorfile.txt	エラー メッセージを <b>errorfile.txt</b> という名前のテキスト ファイルに出力します。このファイルには、エラー検出によって検出されたエラーやリークのリストではなく、エラー検出を実行しようとしているときに生成されたエラー メッセージのみが含まれています。
/S	サイレント モードで実行します。エラー発生時に [検出されたプログラム エラー] ダイアログ ボックスを表示しないようにします。
/W workingdirectory	ターゲットの作業ディレクトリを設定します。
target.exe [target args]	起動する実行可能ファイルとその引数

**メモ：** 使用する実行可能プログラムが現在のパスにない場合は、ディレクトリのフル パスを指定する必要があります (実行可能ファイルを探すときにシステムが検索するディレクトリを一覧にする環境変数)。

1つのプログラムに複数のコマンド オプションを指定できます。以下に例を示します。

```
BC.exe /B test.dpbc1 /S /M c:¥testdir¥test.exe
```

## アンマネージ（ネイティブ）C++ プロジェクトを NMDEVENV でコンパイル、 インストール、およびビルドする

コマンドラインからアンマネージ C++ プロジェクトをビルドして、パフォーマンス分析またはカバレッジ分析をするためにインストールする場合は、コマンドラインから NMDEVENV を使用できます。NMDEVENV で、プロジェクトまたはソリューションでアンマネージ コードをコンパイル、インストールし、1つのコマンドラインでプロジェクトまたはソリューションをビルドできます。DevPartner NMCL コマンドのコード インストールメーションおよびコンパイル機能を Visual Studio DEVENV コマンドのビルド機能と結合します。NMDEVENV は Visual Studio DEVENV コマンドに取って代わるものです。

NMDEVENV は、インストール中のプロジェクトまたはソリューションに設定された Visual Studio インストールメーション オプションを使用します。ビルド プロセスでは、標準 C++ コンパイラ ドライバではなく DevPartner NMCL コンパイラ ドライバが使用されます。

NMCL オプションを指定して NMDEVENV を使用し、インストールメーションおよび DEVENV /Build または /Rebuild スイッチを有効にします。プロジェクトまたはソリューションをデバッグせずにビルドするかどうか指定します。[Debug] を使用し、複数のデバッグ構成がある場合、[Debug] は二重引用符で囲み、固有の修飾子を指定して入力する必要があります。たとえば、Debug|Win32)。DEVENV IDE スイッチまたは他のスイッチは必要ありません。

### 前提条件

NMDEVENV を実行するには、以下の環境を整える必要があります。

- ◆ DevPartner Studio 9.1.0 以降がインストールされている。
- ◆ Visual Studio ツールを実行するようにシステム環境を設定する。
- ◆ パス設定に NMCL.EXE と DEVENV.EXE を含める。デフォルトでは、NMCL.EXE は以下の場所にインストールされます。¥Program Files¥Common Files¥Micro Focus¥NMShared

エラー検出のインストールメーションでプロジェクトのデバッグ構成をビルドするには：

```
NMDEVENV /nmbcon sample.vcproj /build debug
```

### nmvcbuild を使用してネイティブ C/C++ コードをインストールする

コマンドラインからプロジェクトをビルドして、エラー検出用としてインストールする場合は、Microsoft vcbuild.exe コンパイラではなく、nmvcbuild.exe を使用する必要があります。vcbuild コンパイラには、デフォルトのコンパイラとリンカを置き換える方法はないため、DevPartner のネイティブ C/C++ インストールメーションを実行できません。nmvcbuild.exe は、vcbuild のネイティブ C/C++ インストールメーションを実行できる、DevPartner 専用に設計されたコマンドライン ユーティリティです。cl.exe と link.exe の起動を監視し、これらを nmc1.exe と nmlink.exe に置き換える vcbuild 用のラッパーとして機能します。

nmvcbuild ユーティリティは、vcbuild および nmc1 と同じコマンドライン パラメータを受け入れます。vcbuild と nmc1 のパラメータは、コマンドラインで vcbuild ? および nmc1 ? と入力すると表示できます。環境変数 nmc1 に必須パラメータを埋め込むこともできます。この場合、nmvcbuild の呼び出し時に vcbuild パラメータのみを渡します。たとえば、次のエントリは、環境変数で nmc1 パラメータを設定します。

```
set nmc1=/NMignore:StdAfx.cpp
```

詳細については、オンライン ヘルプの「**nmcl** オプション」を参照してください。

## 前提条件

**nmvcbuild.exe** を実行するには、以下の環境を整える必要があります。

- ◆ システムに DevPartner Studio をインストールする。
- ◆ Visual Studio ツールを実行するようにシステム環境を設定する。
- ◆ パス設定に **vcbuild.exe** と **nmvcbuild.exe** を含める。デフォルトでは、**nmvcbuild.exe** は以下の場所にインストールされます。

¥Program Files¥Common Files¥Micro Focus¥NMShared

**メモ：** 64ビット バージョンの Windows では、このファイルは以下の場所にインストールされます。

¥Program Files (x86)¥Common Files¥Micro Focus¥NMShared

## 例

エラー検出のインストールメンテーションで **sample** プロジェクトのデバッグ構成をビルドするには

```
nmvcbuild /nmbcon sample.vcproj debug
```

## DevPartner エラー検出設定をカスタマイズする

DevPartner エラー検出設定では、以下のタイプのカスタマイズを行うことができます。

- ◆ 収集する情報のタイプの制限（メモリ リークやリソース リークなど）。
- ◆ 分析の主な各カテゴリで収集する情報のタイプの絞り込み（グラフィック コールによって生成されるリソース リークだけを検索するなど）。
- ◆ イベントやエラーと共に記録するコール スタック、パラメータ データ、戻り値などの追加情報の量の決定。
- ◆ DevPartner エラー検出ユーザー インターフェイスのルック アンド フィールドの制御。これには、フォント、色、強調表示の変更や、[ 検出されたプログラム エラー ] ダイアログ ボックスを表示するかどうかが含まれます。
- ◆ 以前に作成した DevPartner エラー検出設定の保存と復元。

DevPartner エラー検出設定をカスタマイズして、収集するデータの量と監視するアプリケーションの部分を制御します。

DevPartner エラー検出設定は、以下のグループに分かれています。

- ◆ 全般
- ◆ データ収集
- ◆ API コール レポートニング
- ◆ コール バリデーション
- ◆ COM コール レポートニング
- ◆ COM オブジェクトの追跡
- ◆ デッドロック分析
- ◆ メモリの追跡
- ◆ .NET 分析
- ◆ .NET コール レポートニング
- ◆ リソースの追跡
- ◆ モジュールとファイル
- ◆ フォントと色
- ◆ 構成ファイル管理

## 全般

[全般]設定の下のチェック ボックスを使用して、以下を制御します。

- ◆ イベント ログ

**メモ：** イベント ログ「サイレンス」エラー検出を無効にします。イベント ログを再度有効にするまでエラー検出では何もレポートされません。

- ◆ 各エラーに [ 検出されたプログラム エラー ] ダイアログ ボックスを表示するかどうか。
- ◆ エラー検出の終了時または別のセッションの開始時にプログラム検証結果の保存を確認するプロンプトを表示するかどうか。
- ◆ ターゲット アプリケーションが存在する、または存在しない場合に [ メモリおよびリソース ビューア ] ダイアログ ボックスを表示するかどうか。
- ◆ ソース ファイルとシンボル ファイルを検索するディレクトリ。
- ◆ 作業ディレクトリ (DevPartner エラー検出をスタンドアロン モードで使用する場合にのみ使用可能)。
- ◆ コマンド ライン引数の指定 (DevPartner エラー検出をスタンドアロン モードで使用する場合にのみ使用可能)。

## データ収集

[データ収集]設定を使用して、以下の機能を制御します。

- ◆ 各種のコール スタックの数
  - ◆ スカラー以外のパラメータ (構造、クラス、ポインタなど) の保存するデータ量と戻り値
- メモリが限られたコンピュータを使用している場合、または大規模で複雑なアプリケーションを分析する場合は、[メモリ割り当ての最大コール スタック数]を制限してメモリの所要量を削減できます。

## APIコール レポートイング

[APIコール レポートイング]設定を使用して、[APIコール レポートイングを有効にする]が選択されている場合に記録する Windows API コールのタイプを制御します。Windows メッセージのログを制御することもできます。

ログ ファイルのサイズを小さくするには、特定の Windows モジュールの API コールを選択して有効にします（たとえば、グラフィック コールを記録するには GDI32 を選択）。

## コールバリデーション

[コールバリデーション]設定を使用して、DevPartner エラー検出で Windows API パラメータと戻り値を検証するかどうかを制御します。デフォルトでは、DevPartner エラー検出はパラメータを検証しません。

メモリの使用も追跡している場合は、[メモリ ブロック チェックを有効にする]を選択できます。このオプションを選択すると、DevPartner エラー検出ではメモリ追跡システムから収集した情報を使用してより詳細なパラメータ分析が実行されます。この機能を有効にするとより多くのエラーが検出されますが、パフォーマンスに影響を与えます。

DevPartner エラー検出には、Windows API で実行される検証のタイプを制限できる設定が含まれています。これらの設定を使用すると、不正なエラーを生成する可能性のあるエラーのカテゴリを選択解除できます。この例には、フラグ チェック、範囲チェック、列挙チェックがあります。ハンドルとポインタを詳細に分析するが、その他のタイプの検証は必要ない場合は、これらのオプションを確認してください。

DevPartner エラー検出では、チェックする Windows API を選択できます。デフォルトではすべての Windows API がチェックされます。限定的な API コールのセットが対象の場合は、これらのモジュールだけを選択します。これにより、検出されるエラーの数は減少しますが、パフォーマンスは向上します。

## COM コール レポートイング

[COM コール レポートイング]設定を使用して、[選択したモジュールに実装された COM メソッド コールのレポートを有効にする]が選択されている場合に記録する COM インターフェイスを制御します。

デフォルトでは、[選択したモジュールに実装された COM メソッド コールのレポートを有効にする]が選択されている場合、DevPartner エラー検出ではすべての既知の COM インターフェイスがレポートされます。パフォーマンスを向上させるには、チェックする必要がある COM インターフェイスだけを選択します。[COM コール レポートイング]の下に表示される ツリー ビューを使用します。チェックする COM インターフェイスの数を減らすと、ログ ファイルのサイズが減少し、パフォーマンスが向上します。

[リストされていないモジュールに実装された COM メソッド コールをレポートする]を選択することもできます。

## COM オブジェクトの追跡

DevPartner エラー検出では、アプリケーション内の COM の使用を監視し、インターフェイスをリークしているすべてのコードをレポートできます。インターフェイス リークが検出された場合、DevPartner エラー検出によってアプリケーション内のすべての AddRef と Release を示した COM 使用回数グラフが表示されます。このグラフを使用して、欠落している AddRef コールや Release コールをアプリケーションの情報に基づいてすばやく特定できます。

デフォルトでは、DevPartner エラー検出では COM オブジェクトの追跡は有効ではありません。この機能を有効にするには、**[COM オブジェクトの追跡を有効にする]**を選択します。COM オブジェクトの追跡が有効な場合、**[すべての COM クラス]**を選択することも、表示されたリストからクラスを個別に選択することもできます。

## デッドロック分析

マルチスレッドのアプリケーションでデッドロックを監視するには、デッドロック分析を使用します。これには次のような分析が含まれます。

- ◆ アプリケーションでデッドロックの発生を監視してレポートします。
- ◆ アプリケーション内で同期オブジェクトの使用パターンを監視して潜在的なデッドロックを検出します。
- ◆ アプリケーションを監視して同期オブジェクトのエラーを検出します。

## メモリの追跡

[メモリの追跡]設定を使用して、アプリケーションで実行されるメモリ リーク検出のタイプを制御します。[メモリの追跡]は、デフォルトで有効です。メモリ リーク検出を実行しない場合は、**[メモリの追跡を有効にする]**をオフにします。

[メモリの追跡]設定はあらかじめ設定されており、大部分のアプリケーションについて適切な結果が生成されます。**[FinalCheck を有効にする]**、**[保護バイト]**、**[確保時にフィルする]**、**[解放時に無効データをフィルする]**の各設定については特に注意が必要です。

### FinalCheck を有効にする

アプリケーションが FinalCheck でインストゥルメントされていない場合、**[FinalCheck を有効にする]**をオンにしても影響はありません。**[エラー検出用にインストゥルメントする]**を選択した場合は、FinalCheck がデフォルトでオンになります。FinalCheck を実行せずにインストゥルメンテーションを有効にするには、**[エラー検出設定]**の**[メモリの追跡]**ペインで FinalCheck を無効にする必要があります。

**[FinalCheck を有効にする]**をオンにしたままにし、すでにインストゥルメントされているアプリケーションで詳細でない ActiveCheck 分析を実行する場合にのみオフにして使用することをお勧めします。

### 保護バイト

保護バイトは、ActiveCheck 分析でのメモリ オーバーランの検出に使用されます。ヒープ破壊が発生し、DevPartner エラー検出で問題が検出されない場合は、**[回数]**設定をより大きい値にすることを検討してください。これらの設定を使用して検索の困難なヒープ エラーを追跡する方法のヒントについては、オンライン マニュアルを参照してください。

### [確保時にフィルする]と[解放時に無効データをフィルする]

**[確保時にフィルする]**では、メモリが割り当て時の既知の状態に設定されます。**[解放時に無効データをフィルする]**では、メモリが解放時の既知の状態に設定されます。

使用されているバイト パターンは、プログラムの実行中に誤って使用された場合にアプリケーションでエラーが生成されるように、慎重に選択されています。これらの設定の詳細については、オンライン マニュアルを参照してください。

## UserAllocators.dat

独自のメモリ割り当てロジックを作成する場合、またはグローバル operator newを上書きする場合は、第4章、「ユーザーが作成したアロケータの使用」を参照し、以下のファイルのドキュメント（コメントの形式）を確認してください。

**C:\Program Files\Micro Focus\DevPartner Studio\BoundsChecker  
Data\UserAllocators.dat**

**メモ：** 64ビットバージョンのWindowsでは、このファイルは以下の場所にインストールされます。**Program Files (x86)\Micro Focus\DevPartner Studio\BoundsChecker\Data\UserAllocators.dat**

## .NET コール レポートイング

[.NET コール レポートイング]設定を使用して、[.NET メソッド コール レポートイングを有効にする]が選択されている場合に記録する .NET アセンブリを制御します。

.NET コール レポートイングと COM コール レポートイングを組み合わせると、両方の側の COM 相互運用を確認できます。

.NET ユーザー アセンブリと .NET システム アセンブリは、ツリー ビュー コントロールの別の分岐に表示されます。

**メモ：** .NET コール レポートイングは、大量のデータを生成して、システムを減速させる可能性があります。フレームワークをデバッグして理解する必要がある場合にだけ .NET コール レポートイングを有効にして、チェックが必要なアセンブリだけを選択します。[すべてのタイプ]ツリー ビューで選択するアセンブリの数を減らせば、ログ ファイルのサイズが小さくなり、パフォーマンスが向上します。

## .NET 分析

DevPartner エラー検出は、ネイティブ アプリケーションとマネージ アプリケーションの混在をサポートしています。混在環境で作業している場合は、[.NET ランタイム分析を有効にする]を選択できます。DevPartner エラー検出は以下のタイプの .NET 分析をサポートしています。

- ◆ ネイティブ コードからマネージ コードに渡された未処理の例外の監視
- ◆ .NET ファイナライザの分析
- ◆ マネージ コードからネイティブ コードへの相互運用性
- ◆ ガベージ コレクション イベントの監視

## .NET 相互運用性

DevPartner エラー検出の .NET 相互運用性機能では、マネージ コードからネイティブ コードへのアプリケーション移行の回数が監視されます。この情報を使用して、使用パターン、およびマネージ コードで書き直すことが効果的なターゲットのネイティブ コードを分析します。最良の結果を得るには、この機能を [相互運用性レポートのしきい値] パラメータと共に使用して、条件を満たした使用の独自の下限を指定します。

## リソースの追跡

[リソースの追跡]設定を使用して、アプリケーションで実行されるリソース リーク検出のタイプを制御します。[リソースの追跡]は、デフォルトで選択されています。リソース リーク検出を実行しない場合は、[リソースの追跡を有効にする]チェック ボックスをオフにします。

リソースの追跡を選択した場合、すべてのリソース リークを検索することも、Windows API の特定のライブラリに関連付けられた特定のリソースに限定して検索することもできます。

リソースはライブラリ別にグループ化され、各ライブラリ内でリソースの解放に使用された API コール別にグループ化されています。たとえば、レジストリを操作する大量のコードを作成した場合、**ADVAPI32**以外のすべてのライブラリを選択解除し、**RegCloseKey**だけを選択することもできます。

## モジュールとファイル

[モジュールとファイル]の設定を使用して、以下の操作を実行します。

- ◆ アプリケーション内の監視または無視する必要がある実行ファイルとライブラリを特定します。
- ◆ シンボルを使用できる場合、監視または無視する実行可能ファイルとライブラリのリストをソース ファイル レベルまで絞り込みます。
- ◆ DevPartner エラー検出アナライザで無視する必要があるシステム ディレクトリのリストを特定します。

[モジュールとファイル]設定を使用して、DevPartner エラー検出で監視するアプリケーションの部分を制御します。たとえば、大規模なアプリケーションや ISAPI フィルタなどのアプリケーションを作成するときに [モジュールとファイル]設定の使用を検討します。

**メモ：** [モジュールとファイル]設定内のすべてのモジュールを無効した場合は、エラーの種類によって報告されるものとされないものがあります。エラー検出では、任意のモジュール内のメモリ オーバーランと、**MFCxxxx.dll**ライブラリが原因で発生したその他のイベントは必ずレポートされます。

詳細については、「[\[モジュールとファイル\]設定の使用](#)」(36 ページ)を参照してください。

## フォントと色

[フォントと色]設定を使用して、DevPartner エラー検出ユーザー インターフェイスの各アイテムのフォント、色、強調を変更します。

## 構成ファイル管理

[構成ファイル管理]を使用して、プロジェクトごとに複数の設定ファイルを作成します。[図 1-1](#) (21 ページ)に、使用可能な [構成ファイル管理]オプションを示します。ソフトウェア開発サイクル全体をとおしてこれらの設定ファイルを使用して、さまざまなタイプの分析を実行できます。作成できる以下の設定ファイルの例を検討してください。

- ◆ [コール バリデーション]と[モジュールとファイル]を使用して、ユーザーのコンポーネントのみを選択します。アプリケーションに新しいコードを追加するときに、これらの設定を日常的に使用します。
- ◆ 新しいコンポーネントを完成させるとき、または既存のコンポーネントに比較的大きな変更を加えるとき、[メモリの追跡]と[リソースの追跡]の設定を使用します。

- ◆ 主なマイルストーンの結果を分析するために週末にバッチ モードで使用する設定ファイルを作成します。ビルドを FinalCheck でインストールして、レポートの分析時に最も詳細な情報を取得することもできます。
- ◆ さまざまなモジュールのセットを選択し、すべての分析機能を無効にした設定ファイルを作成します。この設定ファイルをロードし、対話的なセッション中に必要なオプションを選択できます。これは、複雑なモジュールやファイルの設定を管理する必要がある場合に特に役立ちます。

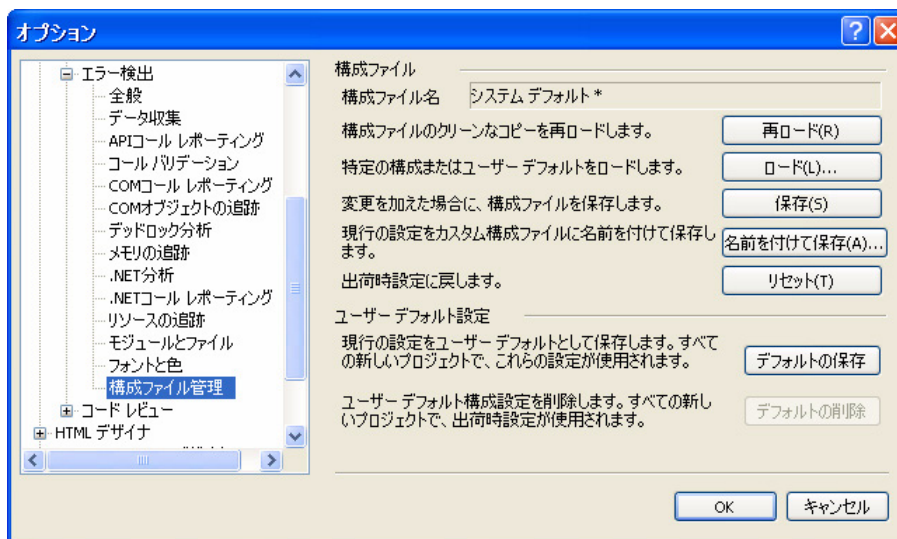


図 1-1 構成ファイル管理設定

## 構成ファイルの機能

[構成ファイル管理] ページでは、以下の機能を使用できます。

- ◆ **構成ファイル名**：構成ファイルのフルパスと名前
- ◆ **再ロード**：すべての変更を破棄して、現在の構成ファイルを再びロードします。この操作では、最後に保存された状態の構成ファイルがロードされます。
- ◆ **ロード**：[ロード元] ダイアログ ボックスを開きます。[内部ユーザー デフォルト] を選択して、ユーザーのデフォルト設定をロードします。[構成ファイル] を選択すると、[構成ファイルのロード] ダイアログ ボックスが開きます。このダイアログ ボックスで、ロードする別の構成ファイルを選択します。
- ◆ **保存**：現在ロードされている構成ファイルの変更内容をすべて保存します。
- ◆ **名前を付けて保存**：[構成ファイルの保存] ダイアログ ボックスを開きます。このダイアログ ボックスから、現在の構成オプションを別のファイル名で保存します。
- ◆ **リセット**：プログラム プロパティ設定をすべて出荷時のデフォルト設定に戻します。
- ◆ **デフォルトの保存**：現在の設定をユーザーのデフォルトとして保存します。新しいプロジェクトのすべてでこの設定が使用されます。
- ◆ **デフォルトの削除**：ユーザーのデフォルトの構成設定を削除して、出荷時の設定に戻します。新しいプロジェクトのすべてで出荷時の設定が使用されます。



## 第2章

# プログラムのチェックおよび分析

この章では、DevPartner エラー検出で実行できるエラー検出タスクについて説明します。また、DevPartner エラー検出で実行できるその他のタスクについても説明します。

### エラー検出タスク

通常、DevPartner エラー検出には以下のようなタスクがあります。

- ◆ メモリ リーク、リソース リーク、インターフェイス リークを検索する
- ◆ ポインタ エラーとメモリ エラーを検索する
- ◆ メモリ破壊を検索する
- ◆ .NET アプリケーションでレガシー コードを分析する
- ◆ Win32 API コールを検証する
- ◆ アプリケーションのデッドロックを検索する

### リークを検索する

DevPartner エラー検出は、メモリ リーク、リソース リーク、インターフェイス リークの検索に優れています。デフォルトでは、DevPartner エラー検出ではメモリ リークとリソース リークが検索され、インターフェイス リークは検索されません。インターフェイス リークを検索するには、[COM オブジェクトの追跡] 設定で **[COM オブジェクトの追跡を有効にする]** を選択します。

DevPartner エラー検出には、ActiveCheck と FinalCheck の2つのメモリ リークを検出する方法があります。ActiveCheck では、すべての Windows アプリケーションのメモリ リークを検索します。リークはアプリケーションのシャット ダウン時にレポートされます。FinalCheck では、メモリ リークがアプリケーションで発生すると、実行時に包括的にレポートされます。この例には、ローカル変数が範囲外になった場合、メモリのブロックへの最後のポインタが再割り当てされた場合、ダングリング ポインタの使用、およびその他の検索の困難なエラーがあります。

### ポインタ エラーとメモリ エラーを検索する

DevPartner エラー検出では、ActiveCheck テクノロジーと FinalCheck テクノロジーの両方を使用してポインタ エラーとメモリ エラーを検索できます。ActiveCheck モードでは、DevPartner エラー検出では Windows コールに渡されたポインタを監視してエラーを検索します。[コール バリデーション] と [メモリの追跡] の設定を変更して、DevPartner エラー検出で実行されるチェックの量を設定します。

FinalCheckを使用してプログラムを再コンパイルすると、DevPartner エラー検出はプログラム内のすべてのポインタ参照で使用方法が正しいかどうかをチェックします。FinalCheck では、プログラムの非常に詳細な分析を行い、未初期化変数、ダングリング ポインタ、非関連ポインタの比較、配列のインデックス エラーなどの検出が困難な問題を特定できます。

## メモリ破壊を検索する

DevPartner エラー検出は、以下のような問題によって発生するメモリ破壊の問題を検索する場合に役立ちます。

- ◆ オーバーランを割り当てられたバッファ
- ◆ 解放後のメモリへの継続的なアクセス
- ◆ リソースの複数回の解放（二重解放など）

DevPartner エラー検出では ActiveCheck モードでこれらのエラーの多くを検出できますが、FinalCheck では最も詳細な分析を実行できます。

メモリ オーバーラン エラーが発生し、ActiveCheck しか使用できない場合は、[メモリの追跡] 設定の [実行時のヒープ ブロック チェック] についての詳細情報を含むオンライン マニュアルを参照してください。

## .NETアプリケーションでのレガシー コードへの移行を分析する

DevPartner エラー検出では、ネイティブ アプリケーション プログラミングからマネージ アプリケーション プログラミングに移行する場合に役立つ以下のような分析を実行できます。

- ◆ Windows アプリケーションのネイティブ部分の詳細な分析
- ◆ 混合コードを使用するアプリケーションのネイティブ部分とマネージ部分の間の移行レイヤの分析
- ◆ マネージ アプリケーションでのファイナライザの分析

これらのタイプの分析では、以下の対象を監視できます。

- ◆ ネイティブ アプリケーションからスローされマネージ コードに渡された未処理の例外
- ◆ パフォーマンスの問題を引き起こす可能性のあるガーベジ コレクタの動作
- ◆ マネージ コードとネイティブ コード間の COM 相互運用性
- ◆ マネージ コードからネイティブ Windows ライブラリへの P/Invoke のコール
- ◆ マネージとネイティブの境界にわたるコールの頻度

この情報を使用して、アプリケーションの移行プロセスを計画し、監視できます。

## ネイティブ コードから混合コードまたはマネージ コードへ移行する

移行プロセスでは以下の手順を実行します。

- 1 ネイティブ アプリケーションの COM 使用を分析して、使用されているオブジェクトを確認します。
- 2 P/Invoke と COM を使用してマネージ コードのアプリケーション部分を書き換え、アプリケーションのネイティブ部分呼び出します。
- 3 [.NET 分析] で、**[.NET 分析を有効にする]** と **[PInvoke 相互運用性の監視]** を選択して、新たに作成したコードと既存のネイティブ コード間の移行を分析します。
- 4 必要な変更を加えます。
- 5 [.NET 分析] で、**[COM 相互運用性の監視]** と **[PInvoke 相互運用性の監視]** を選択して、マネージ コードとネイティブ コード間で行われたコールの回数を監視します。パフォーマンス データを使用すると、以下の追加の変更について決定する際に役立ちます。
  - a マネージ コードに移植する必要がある COM オブジェクトを判別する。
  - b 新しいメソッドを追加してマネージ コードとネイティブ コード間のコールの数を削減する必要があるかどうかを決定する。たとえば、データ レコードを一度に 1 項目ではなく 10～20 項目要求するメソッドを追加できます。
  - c ネイティブ API (Windows API など) へのコールが効率的に行われているかどうかを判別する。

ネイティブからマネージの境界にわたってスローされる未処理の例外をチェックすることもできます。そのためには、**[.NET 分析]** で **[例外の監視]** を選択します。ネイティブ コードで記述されたアプリケーションでは、例外によって呼び出し側にコールまたはメソッドが失敗したことが通知されます。アプリケーションの部分がマネージ コードで書き換えられたときに、例外の使用を監視して例外がマネージ コードに移行する前にキャッチします。

## Win32 API コールを検証する

DevPartner エラー検出では、多数の Windows コールが認識されます。DevPartner エラー検出では、この機能を使用して、ポインタ、フラグ、列挙、ハンドル、リターン コードを検証できます。**[コール バリデーションを有効にする]** を選択して、アプリケーションで Windows コールが適切に使用されていることを確認します。

以下のコール バリデーション機能を設定できます。

- ◆ 監視対象の Windows コールを選択する。
- ◆ フラグ、範囲、列挙のチェックなどのさまざまなタイプの検証を選択的に無効にする。

これらの機能を使用して、ハンドルやポインタなどの重要なパラメータを検証し、現在のタスクに関係ないエラーのレポートが減少するように DevPartner エラー検出を設定できます。

## アプリケーションのデッドロックを検索する

DevPartner エラー検出では、アプリケーションでデッドロックを引き起こすコードを特定できます。[デッドロック分析を有効にする]を選択して、デッドロックを検索します。追加のコントロールを使用すると、デッドロック分析を微調整できます。

## DevPartner エラー検出の拡張使用

エラー検出タスク以外に、DevPartner エラー検出には以下の用途があります。

- ◆ 複雑なアプリケーションを理解するための補助
- ◆ リバース エンジニアリング ツール
- ◆ アプリケーションのストレス テスト用ツール

## 複雑なアプリケーションを理解する

DevPartner エラー検出には、大規模で複雑なアプリケーションの理解に役立つ複数のツールがあります。以下の3つのシナリオを考えてみます。

- ◆ 既存のチームに新しい開発者が加わり、各種 DLL の対話方法を理解する必要があります。
- ◆ 問題（クラッシュやメモリ リークなど）の問題を解決するためにプロジェクトにコンサルタントが呼び寄せられ、厳しいエンジニアリングのスケジュールを前提に最も多くのリソースを投入する場所を理解する必要があります。
- ◆ 開発者がサードパーティ製ライブラリの使用を開始し、ライブラリで Windows リソースがリークしている理由を知る必要があります。多くの場合、問題はライブラリではなくライブラリの使用方法にあります。

以下の DevPartner エラー検出機能を使用して、これらのシナリオに対処できます。

## COM オブジェクトの追跡

多くのアプリケーションで、社内の開発者、サードパーティ ベンダ、または Microsoft によって提供された COM オブジェクトが使用されます。これらの COM オブジェクトが正しく使用されない場合、インターフェイス リークが発生します。インターフェイス リークによってメモリ リークとリソース リークが引き起こされます。ヒープから割り当てられたオブジェクトが適切に解放されず、そのためそれらのオブジェクトによって割り当てられたメモリが適切に解放されません。

[COM オブジェクトの追跡]を使用して、リークした COM オブジェクトを表示できます。この情報は、アプリケーションの AddRef に対応する欠落した Release コールを行う場所を特定する場合に役立ちます。

## デッドロック アナライザ

デュアル プロセッサが普及する前に記述された多くのレガシー アプリケーションは、現在の高パフォーマンスなコンピュータ システム上で実行されると予期しない動作をすることがあります。たとえば、アプリケーションは同期オブジェクトの不適切な使用によってデッドロック状態になることがあります。

DevPartner エラー検出のデッドロック分析では、デッドロックを引き起こす可能性のあるコードを特定できます。この分析では潜在的なデッドロックも特定できることに注意してください。潜在的なデッドロックとは、アプリケーションの実行中に一連の望ましくない状態が進展した場合、いつ発生してもおかしくないデッドロックのことです。DevPartner エラー検出では、これらの潜在的なデッドロックが実稼働環境で発生する前に特定できます。

## モジュールとファイル

複雑なアプリケーションは、多くの場合複数の組織にわたって開発され、外部ベンダから購入したライブラリを含んでいます。デフォルトで、DevPartner エラー検出ではシステム以外の DLL のエラーがレポートされます。[モジュールとファイル]設定を使用して、DevPartner エラー検出のエラー レポートとコール レポートをアプリケーションの特定の部分に制限します。その結果、複雑な問題の解決に使用できるより有効なエラー レポートが生成されます。

**メモ：** [モジュールとファイル]設定内のすべてのモジュールを無効した場合は、エラーの種類によって報告されるものとされないものがあります。エラー検出では、任意のモジュール内のメモリ オーバーランと、MFCxxxx.dll ライブラリが原因で発生したその他のイベントは必ずレポートされます。

## [モジュール]タブ

DevPartner エラー検出の[モジュール]タブ (図 2-1 (27 ページ) を参照) および関連する詳細ペインには、プログラムへのビューが表示されます。このビューには、プログラムの実行中にロードされている DLL が表示されます。このレポートをよく確認すると、以下の質問に回答し、トレードオフを行う必要がある場合により的確な決定を下すことができます。

- ◆ このモジュールはインストールされていますか。また、その方法。
- ◆ ほんとうに特定の DLL が必要ですか。
- ◆ DLL のただ 1 つのメソッドを呼び出して  $n$  個の追加の DLL がプロセスにロードされる負担を負う価値がありますか。
- ◆ DLL が非優先のロード アドレスにロードされたのはなぜですか。
- ◆ 同じ DLL の複数の版がメモリにロードされたのはなぜですか。

モジュール名	優先...	実際...	ファイルのパー...	フルパス	シーケンス	ロー
BugBenchDotNet.exe	00400000	00400000	1.0.2147.23706	D:\WP_Mainline\B...BoundsChecker#S...	27	1
ADVAPI32.dll	77DD0000	77DD0000	5.1.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	32	1
RPCRT4.dll	77E70000	77E70000	5.1.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	35	1
mscoree.dll	79170000	79170000	1.1.4322.2032	C:\WINDOWS\system32\...	37	1
KERNEL32.dll	7C800000	7C800000	5.1.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	39	1
ntdll.dll	7C900000	7C900000	5.1.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	44	1
MSVCRT.dll	77C10000	77C10000	7.0.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	49	2
PSAPI.DLL	76BF0000	76BF0000	5.1.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	54	2
NETAPI32.dll	5B860000	5B860000	5.1.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	56	1
EntApi.dll	37000000	37000000	5.1.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	59	1
USER32.dll	77D40000	77D40000	5.1.2600.2622	C:\WINDOWS\system32\...	69	1
GDI32.dll	77F10000	77F10000	5.1.2600.2180	C:\WINDOWS\system32\...	72	1
SHLWAPI.dll	77F60000	77F60000	6.00.2900.2753	C:\WINDOWS\system32\...	76	1
MSVCR71.dll	7C340000	7C340000	7.10.3052.4	C:\WINDOWS\Microsoft.NET\Fram...	80	1
...	...	...	...	...	...	...

図 2-1 [モジュール]タブと詳細ペイン

## 検証結果ペインでの表示とソート

DevPartner エラー検出には、アプリケーションについて収集されたデータを表示するさまざまな方法があります。最初に、DevPartner エラー検出では、**検索結果ペイン**に高レベルレポートの**[サマリ]**タブが表示されます。**[サマリ]**タブを確認し、エントリをダブルクリックすると、詳細が表示されます。

情報の複数のレイヤを移動するこの機能では、データのさまざまなビューが表示されます。以下に例を示します。

- ◆ 技術リーダーは、ある期間におけるメモリ リークがより多いかより少ないかなどの傾向を探してデータを確認することがあります。
- ◆ 開発者は、メモリ オーバーラン エラーやダングリグ ポインタなどを収集する必要がある場合があります。

このマルチレベルのビューでは、最も関連の深いデータを特定し、**検索結果ペイン**のいずれかのタブ (**[メモリ リーク]**、**[その他のリーク]**、**[エラー]**、**[.NET パフォーマンス]**、または**[モジュール]**) でより詳細なビューにアクセスできます。いずれかのタブでデータを表示するときに、カラム見出しをクリックすると、データをサイズ、発生回数、場所などでさらにソートできます。

## リバース エンジニアリング

DevPartner エラー検出を使用して、Windows アプリケーションを分析できます。このセクションで説明するような設定がある構成を作成すると、DevPartner エラー検出を使用して Windows アプリケーションによって実行される処理を監視し、レポートできます。

### データ収集

**[コール パラメータのデータ表示の深さ]**パラメータを大きくして、より詳細な API パラメータ情報を生成します。データ表示の深さを大きくすると、処理速度が遅くなり、ログ ファイルのサイズが増加することがあります。

### API コール レポートイング

**[API コール レポートイングを有効にする]**を選択して、API コールと戻り値をログに記録します。DevPartner エラー検出がパラメータとパラメータとして渡されるクラスについて収集する詳細の量は、**[データ収集]**設定の**[コール パラメータのデータ表示の深さ]**の値によって決まります。

アプリケーションに送信されるすべてのウィンドウ メッセージを記録するには、**[ウィンドウ メッセージを収集する]**をオンにします。このオプションを選択すると、アプリケーションがマウス クリックやイベントの再ペイントなどのさまざまなウィンドウ イベントに応答する方法のビューが表示されます。

**メモ：** これらのオプションのいずれかを選択すると、ログ ファイルのサイズが増加し、DevPartner エラー検出のパフォーマンスが遅くなりことがあります。

API コール レポートイングのオーバーヘッドを最小限に抑えるには、現在のタスクに最も関連の深いシステム DLL のみを選択します。

### COM コール レポートイング

**[選択したモジュールに実装された COM メソッド コールのレポートを有効にする]**をオンにして、COM メソッド コールの収集を有効にします。

COM コール レポート情報和管理可能にするには、最も関連の深いインターフェイスのみを選択し、[すべてのコンポーネント] チェック ボックスをオフにします。

## .NET コール レポートニング

[**NET** メソッド コール レポートニングを有効にする] をオンにして、.NET メソッド コールの収集を有効にします。.NET コール レポートニングを管理可能にするには、.NET ユーザー アセンブリのみを選択します (デフォルト)。

## .NET 分析

ネイティブとマネージの混合コードのアプリケーションを記述する場合は、**.NET** 分析機能を使用して、以下のことを行います。

- ◆ ネイティブ コードからマネージ コードにスローされた未処理の例外を監視します。
- ◆ マネージ コードからネイティブ コードへ行われたコール (P/Invoke コールまたは COM メソッド コール) を監視します。
- ◆ [例外の監視] を選択して例外を監視します。

マネージ コードからネイティブ コードへのコールを監視するには、[COM 相互運用性の監視] または [PInvoke 相互運用性の監視] を選択し、次に適切な [相互運用性レポートのしきい値] の値を選択します。マネージ コードからネイティブ コードへのコールを監視する場合は、レポートのしきい値に十分大きい値を選択し、[モジュールとファイル] 設定を使用して不要な情報を減らします。

## オフにするリバース エンジニアリングの機能グループ

**ヒント:** リバース エンジニアリング セッションの終了後は、これらの機能を必ず選択してください。

DevPartner エラー検出には、Windows アプリケーションでさまざまなタイプのリークとエラーを監視するツールがあります。ただし、リバース エンジニアリング セッション中は、DevPartner エラー検出のエラーとリーク検出のロジックをオフにすることをお勧めします。これらの機能を [プログラムの設定] ダイアログ ボックス (DevPartner エラー検出スタンドアロンの場合) または [オプション] ダイアログ ボックス (Visual Studio IDE の場合) で無効にするには、以下の手順を実行します。

- 1 [コールバリデーション] で、[コールバリデーションを有効にする] をオフにします。
- 2 [COM オブジェクトの追跡] で、[COM オブジェクトの追跡を有効にする] をオフにします。
- 3 [メモリの追跡] で、[メモリの追跡を有効にする] をオフにします。
- 4 [リソースの追跡] で、[リソースの追跡を有効にする] をオフにします。
- 5 [デッドロック分析] で、[デッドロック分析を有効にする] をオフにします。

これらの機能は、調べているコードのバグを特定するためのものです。これらの機能をオフにすると、コンポーネントまたは API のコードが機能する方法を理解するのに役立つ情報に集中できます。

## モジュールとファイル

デフォルトで、DevPartner エラー検出では [システム ディレクトリ] 除外リストに表示されている部分を除いて、アプリケーションのすべての部分についてレポートします。

リバース エンジニアリングを行う場合、通常は除外される DLL を監視できます。DLL を監視すると、その DLL を追跡して動作方法を確認できます。

たとえば、特定の共通コントロールで WIN32 API コールが使用される方法を理解するには、**COMCTL32.DLL** を明示的に追加し、**[API コール レポーティング]** を有効にします。

システム DLL を明示的に監視するには、**[モジュールの追加]** をクリックし、希望の DLL を追加します。

## 構成ファイル管理

**[構成ファイル管理]** を使用すると、開発サイクルで特別なタスク用に設計された設定を作成し、保存できます。

以下に例を示します。

- ◆ メモリ リーク、リソース リーク、および COM リークの検出
- ◆ メモリとバリデーションのみ
- ◆ リバース エンジニアリング
- ◆ 上記のいずれか。ただし、カスタム **[モジュールとファイル]** 設定を使用して限定された DLL のセットあり。

DevPartner エラー検出でアプリケーションのビジネスにきわめて重要な部分（パスワードのチェックなど）が監視されないようにするには、実行時に DevPartner エラー検出呼び出し可能インターフェイスを呼び出して、DevPartner エラー検出ログを選択的に無効にできます。詳細については、以下のファイルのイベント レポートに関するコメントを参照してください。

**C:\Program Files\Micro Focus\DevPartner Studio\BoundsChecker  
ErptApi\NmApiLib.h**

**メモ：** 64ビット バージョンの Windows では、このファイルは以下の場所にインストールされます。

**%Program Files (x86)\Micro Focus\DevPartner Studio\  
BoundsChecker\ErptApi\NmApiLib.h**

## ストレス テスト

DevPartner エラー検出の実行に伴い、大きい負荷がかかっている状態でのみ発生する多数の予期しない状況をアプリケーションで処理するという副作用が発生します。

### ゼロ以外の未初期化データの処理

多くのアプリケーションは、動的メモリ割り当てルーチンから返されるローカル変数とメモリが何らかの値に初期化されるという誤った想定のもとに記述されています。DevPartner エラー検出では、未初期化データ アクセスの検索を割り当てられると、さまざまなタイプのメモリ上に既知の充てんパターンを書き込みます。この例には、ローカル変数、および new、malloc、HeapAlloc、または LocalAlloc によって割り当てられたメモリがあります。

未初期化メモリがゼロになると想定してアプリケーションが記述されている場合、DevPartner エラー検出で実行するとプログラムがクラッシュしたり、予期しない動作をすることがあります。そのような場合は、アプリケーションを FinalCheck でインストールし、DevPartner エラー検出で再度チェックしてエラーを特定します。

**メモ：** これらのルールに従わない独自のメモリ割り当てルーチンを記述した場合は、UserAllocators.dat ファイルにルーチンのエントリを追加します。詳細については、[第4章、「ユーザーが作成したアロケータの使用」](#)を参照してください。

### 解放時の無効データによるプールのフィル

DevPartner エラー検出では、動的に割り当てられたメモリが解放されたあと、そのメモリに既知のパターンを書き込みます。これにより、解放された構造を参照しようとするアプリケーションではエラーが生成されます。多くの場合、ダングリング ポインタ エラーは診断と修復が困難です。アプリケーションを FinalCheck でインストゥルメントし、DevPartner エラー検出で再度チェックしてエラーを特定します。

**メモ：** これらのルールに従わない独自のメモリ割り当てルーチンを記述した場合は、UserAllocators.dat ファイルにルーチンのエントリを追加します。詳細については、[第4章、「ユーザーが作成したアロケータの使用」](#)を参照してください。

### CPU 負荷が大きい環境での作業

多くの開発者は、非常に高速で負荷の小さいシステムでアプリケーションを作成します。このため、アプリケーションを運用環境に移行したときに、プログラムに不規則な障害が発生します。タイミングとパフォーマンス関連の問題の追跡は困難で、時間がかかる場合があります。

DevPartner エラー検出ではあらゆる面からプログラム フローを監視し、CPU とメモリの作業負荷が大きい状態にアプリケーションを置きます。同時に、DevPartner エラー検出では Windows 関数へのコールでエラーの兆候を監視します。エラーは、[検出されたプログラム エラー] ダイアログ ボックスにレポートされます。

### マルチスレッド コードでのプログラムの検出

多くのアプリケーションは、マルチプロセッサ アプリケーション サーバーを利用するように記述されています。マルチスレッドのアプリケーションが綿密に設計されていない場合、プログラムが負荷のかかる状況に置かれたとき、デッドロックとリソース喪失の問題が発生することがあります。

マルチスレッドのアプリケーションを DevPartner エラー検出で実行すると、各種のスレッドのパフォーマンスが低下し、プログラムによってタイミング関連の問題が表示されることがあります。通常、このような問題の多くは、実稼働状況でプログラムに負荷がかけられた場合に発生します。DevPartner エラー検出を使用すると、開発プロセスで問題を発見し、実稼働に移行する前に修正できます。

DevPartner エラー検出でデッドロック分析を有効にしてアプリケーションを実行し、デッドロック、潜在的なデッドロック、その他の同期バグをチェックします。

### メモリ エラーとポインタ再利用エラーの検出

アプリケーションが複雑になるにつれて、アプリケーションで使用されるメモリの量とポインタの数は大幅に増加します。この問題対処するため、ソフトウェア開発者は DevPartner エラー検出などのツールを使用してメモリ リークとリソース リークを検索します。ただし、リークの検索とプラグはタスクの一部に過ぎません。メモリが解放されると、ブロックに対するすべての未処理のポインタは「ダングリング」として宣言される必要があります。ダングリング ポインタを参照しようとするエラーが生成されます。DevPartner エラー検出の FinalCheck 機能は、ダングリング ポインタを検出し、レポートするように設計されています。

未検出のダングリング ポインタは、プログラムで、解放されたブロック、または解放され、システムのその他の部分で再利用されたブロックが参照される原因となります。単純なデバッグ環境で実行されるプログラムでは、失敗の兆候が示されないことがあります。ただし、同じプログラムが実稼働環境に移されると、ランダムにクラッシュしたり、データが破損したり、予期しない結果を生成したりすることがあります。

## 第3章

# 複雑なアプリケーションの分析

この章では、複雑なアプリケーションをチェックするときに DevPartner エラー検出をより効果的に使用する方法について説明します。

## 複雑なアプリケーションについて

典型的な Windows アプリケーションをデバッグする場合、デフォルトの DevPartner エラー検出設定では、最も一般的なプログラミング問題を解決するのに十分なデータが収集されます。

複雑なアプリケーションをデバッグする場合、エラー検出設定をカスタマイズすると効果的です。

複雑なアプリケーションは次の2つのグループに分類できます。

- ◆ 多数の複雑なコンポーネントを含む大規模なアプリケーション
- ◆ Windows サービス、ActiveX コンポーネント、MTS コンポーネント、COM コンポーネント、ISAPI フィルタなどの非従来型のアプリケーション

### 大規模なアプリケーション

大規模な Windows アプリケーションは、サイズのために監視が困難であるという点のみが例外的です。DevPartner エラー検出を使用すると、大規模なアプリケーション全体を一度に分析するのではなく、論理的で管理可能な区分で分析できます。たとえば、大規模なアプリケーションの1つの DLL を作成する場合、以下のことができます。

- ◆ アプリケーションの部分を分析から除外する。
- ◆ アプリケーションの特定の部分だけを監視する。
- ◆ アプリケーション内の特定のトランザクションだけを監視する。

### 非従来型のアプリケーション

非従来型のアプリケーションでは、複雑なスタートアップや設定の問題により、さまざまなエラー検出方法が必要な場合があります。DevPartner エラー検出を設定して、このようなアプリケーションの監視に必要な特別なデバッグや分析の操作を実行できます。

### DevPartner エラー検出機能と複雑なアプリケーション

以下のエラー検出機能は複雑なアプリケーションを分析する場合に役立ちます。

- ◆ プロセスを待機する機能
- ◆ アプリケーションで監視するモジュールとファイルを限定する機能
- ◆ 実行時にエラー検出ログを有効または無効にする機能

## プロセスを待機

エラー検出を指定してプログラムを実行する代わりに、エラー検出自体をアプリケーション用に初期化して、その処理が完了するまで待機する方法を使用できます。初期化が終了したら、手動でアプリケーションを起動します。または、サービス コントロール マネージャなどの手段を使用することもできます。このオプションを使用すると、IISなどのサービスをデバッグできます。

**メモ：** [プロセスを待機]を使用している場合は、起動するアプリケーションのフル パス名が、エラー検出で検索されるアプリケーションのフル パス名と完全に一致する必要があります。

このオプションは、BoundsCheckerやDevPartnerエラー検出の以前のリリースにおけるImage File Execution Optionsの代わりに使用する機能です。

このオプションは、DevPartnerエラー検出スタンドアロン アプリケーション (bc.exe) を使用している場合にのみ利用できます。Visual Studioに統合されているエラー検出を使用している場合は利用できません。

「初期化して待機」する方法でエラー検出を使用してアプリケーションやサービスをデバッグするには、以下の手順を実行します。

- 1 エラー検出アプリケーション (bc.exe) でテストするイメージを開きます。
- 2 エラー検出を構成し、興味のあるエラーを監視します。
- 3 [プログラム]メニューから[プロセスを待機]を選択します。

エラー検出自体が初期化され、セッションをキャンセルするかどうかを確認するダイアログ ボックスが表示されます。

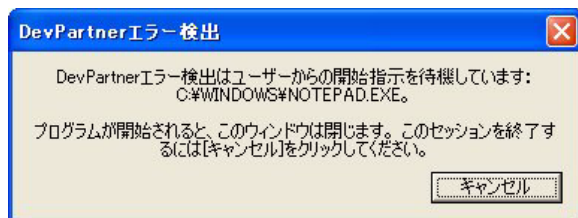


図 3-1 [プロセス待機] ダイアログ ボックス

- 4 通常どおり、アプリケーションを起動します。

通常はサービス コントロール マネージャを使用してアプリケーションを起動している場合は、そのように操作します。アプリケーションを起動すると、エラー検出のダイアログ ボックスは閉じます。

- 5 アプリケーションを実行し、終了します。

## プログラムの限定的な部分を分析する

DevPartnerエラー検出に大規模なアプリケーションまたは複雑なアプリケーション内の限定的な問題領域を指定すると、アプリケーションの残りの部分を無視できます。DevPartnerエラー検出には、プログラムの限定的な部分を分析する場合に役立つ以下の4つのメカニズムがあります。

- ◆ **[モジュールとファイル]**を使用して、分析からプログラムの部分を除外します。
- ◆ **[抑制]**と**[フィルタ]**を使用して、不要な情報が記録されたり表示されたりするのを防ぎます。
- ◆ **[プログラム]>[イベントをログに記録]**メニュー項目または**[イベントをログに記録]**ツールバー ボタンを使用して、エラー検出のログを切り替えます。
- ◆ アプリケーションに条件付きコードを追加して、`StartEvtReporting`と`StopEvtReporting`を呼び出します。

**メモ：** `StartEvtReporting`と`StopEvtReporting`は、アプリケーション内から呼び出してDevPartnerエラー検出ログへのデータの書き込みを制御できるDevPartnerエラー検出関数です。DevPartnerエラー検出がアクティブでない場合、これらのコールはすぐに返されます。

## モジュールとファイル

大規模なアプリケーションを使用している場合は、**[モジュールとファイル]**設定を使用して、アプリケーションの部分が分析されるのを防ぎます。これにより、分析時間を短縮し、不要なエラーメッセージの数を減らせます。以下に除外できる部分の一部を示します。

- ◆ サードパーティ製 DLL を含む不要な DLL
- ◆ DLL または EXE からの個々のソース ファイル
- ◆ DLL ツリー全体
- ◆ ソース コードが使用できない場合は、エラーを除外します。

**メモ：** **[モジュールとファイル]**設定内のすべてのモジュールを無効した場合は、エラーの種類によって報告されるものとされないものがあります。エラー検出では、任意のモジュール内のメモリ オーバーランと、`MFCxxxx.dll` ライブラリが原因で発生したその他のイベントは必ずレポートされます。

[「\[モジュールとファイル\]設定の使用」](#) (36 ページ) を参照してください。

## 抑制とフィルタ

DevPartnerエラー検出によってレポートされるエラーとイベントを非表示にするには、以下の2通りの方法があります。

- ◆ **[抑制]**では、指定したタイプのエラーやイベントがエラー検出ログに記録されなくなります。抑制されたエラーを表示するには、抑制のインストラクションを削除し、DevPartnerエラー検出でアプリケーションを再度実行する必要があります。
- ◆ **[フィルタ]**では、すでにログに記録されているエラーやイベントが非表示になります。フィルタしたエラーの表示と非表示を切り替えられます。

## 選択的イベント ログ

大規模なアプリケーションの小さいセクションを監視するには、**[イベントをログに記録]**メニューまたはツールバー ボタンを使用して、エラー検出ログのオンとオフを切り替えます。この手法は以下の設定を選択した場合に特に役立つことがあります。

- ◆ API または COM コール ログ
- ◆ コール バリデーション

選択的イベント ログをいずれかのリーク検出機能（メモリ追跡、リソース追跡、COM インターフェイス追跡など）と共に使用する場合は、多くのリークがプログラムの終了時まで検出されないことに注意してください。プログラムの終了時にログが無効になっていると、検索しようとしているリークの多くはレポートされません。

リークを検出する場合は、**[モジュールとファイル]**や**[抑制]**を使用して、不要な情報を除外します。

### 条件付きコード

プログラムを変更して DevPartner エラー検出データ収集エンジン呼び出し、エラー検出ログを有効または無効にできます。以下のサンプル コードは、不要な領域周囲のエラー検出ログを無効にする方法を示しています。

```
// Requires library [インストール フォルダ]
¥ErptApi¥NMApiLib.lib

// Include file is located in [インストール フォルダ]¥ErptApi
#include "nmapilib.h"

... [監視対象のコード]
StopEvtReporting()

... [監視対象外のコード]
StartEvtReporting()

... [監視対象のコード]
```

StartEvtReporting または StopEvtReporting API コールを使用して、アプリケーションのビジネスにきわめて重要な部分が DevPartner エラー検出でログに記録されないようにすることもできます。この例には、パスワード検証や暗号化ルーチンがあります。DevPartner エラー検出がアクティブでない場合、API コールはすぐに返されます。

### [モジュールとファイル]設定の使用

アプリケーションから除外する対象を決定するには、以下の手順を実行します。

- 1 DevPartner エラー検出で実行可能ファイルを開きます。
- 2 すべてのデータ収集を無効にします。
  - ◇ DevPartner エラー検出スタンドアロンの場合
    - [プログラム]>[設定]>エラー検出を選択します。
  - ◇ Visual Studio の場合
    - [DevPartner]>[オプション]を選択します。



[オプション]または[設定]ダイアログ ボックスで、[API コール レポーティング]、[コール バリデーション]、[COM コール レポーティング]、[COM オブジェクトの追跡]、[デッドロック分析]、[メモリの追跡]、および[リソースの追跡]の設定をクリアします。

- 3 DevPartner エラー検出でプログラムを実行します。

エラー検出では、アプリケーションで使用されるすべてのDLLが記録されます。すべてのDLLがロードされるようにプログラムを実行し、アプリケーションを終了します。

- 4 DevPartner エラー検出[設定]または[オプション]ダイアログ ボックスを開いて、データ収集設定を選択します。
- 5 [設定]または[オプション]ダイアログ ボックスで、[モジュールとファイル]を選択します。DevPartner エラー検出によって、システム フォルダにあるファイルを除き、アプリケーションで使用されるすべての実行可能ファイルとDLLのリストが自動的に表示されます。
- 6 モジュールとファイルのリストを確認します。リストに表示されたDLLで現在のタスクに関係ないものをすべてクリアします。不要なDLLをクリアしたリストから、各DLLを展開し、監視対象のソース ファイルを選択します。
- 7 特定のフォルダのDLLをすべて除外するには、[システム ディレクトリ]をクリックし、除外するフォルダのリストにフォルダを追加します。システム フォルダから特定のファイルを追加する場合は、[モジュールの追加]をクリックし、監視対象のDLLのリストにファイルを追加します。フォルダ アイコンをクリックすると、1つのフォルダから複数のフォルダに切り替えることができます。表3-1に、アイコンの意味を示します。

表3-1. [モジュール]ダイアログ ボックスのフォルダ アイコンの意味

アイコン	説明
	選択したフォルダはテストから除外されます(特定のDLLが[モジュール]ダイアログ ボックスにも表示されてる場合を除く)。
	選択したフォルダとすべてのサブフォルダがテストから除外されます。

- 8 プログラムの部分のリークとエラーをソース コードなしで除外するには、[ソース コードが利用できる場合にのみ、エラーとリークを表示する]を選択します。

**ヒント：**複数の設定ファイルを作成する場合は、設定ファイルの1つに**基本設定**という名前を付けることができます。[基本設定]設定を開始点として使用して、その他の設定ファイルを作成できます。

- 9 アプリケーションの論理サブセットを作成したら、[構成ファイル管理]を使用して設定を保存します。

表3-2に、[モジュールとファイル]設定を使用する方法のリストを示します。

表3-2. [モジュールとファイル]設定の使用法

デバッグの対象	エラー検出を設定して除外する対象
ActiveX コントロール	ActiveX テスト コンテナ実行可能ファイルなどのActiveX コントロールを含むDLL以外のすべてのモジュール
Windows サービス	デバッグしているサービスの部分に直接関連付けられていないすべてのモジュール
ISAPI フィルタ	ISAPI フィルタ以外のIISまたはW3WPのすべての実行可能ファイルとDLL

表 3-2. [モジュールとファイル]設定の使用法

デバッグの対象	エラー検出を設定して除外する対象
複雑なアプリケーション	解決しようとしている問題に当てはまらないアプリケーションの部分
プロセス外の COM オブジェクト	<code>dllhost.exe</code> や <code>mtx.exe</code> などの、DLLに直接関連付けられていないすべてのモジュール

**メモ：** ユーザーのコード以外のすべてを除外した場合、アプリケーションの部分によって間接的に引き起こされるメモリ リークやリソース リークを確認できないことがあります。

## 監視対象を決定する

複雑なアプリケーションを処理する場合は、アプリケーションの監視対象の部分を確認することが重要です。何を監視し、何を無視するかの決定は、リークやエラーを追跡する場合の成功に影響します。

監視対象を確認するには、アプリケーションに関する以下の質問について検討してください。

- ◆ アプリケーションはどのように起動しますか。
  - ◇ 直接起動しますか。
  - ◇ 別のプログラムを実行して起動しますか。
  - ◇ コントロール ペインから起動しますか。
  - ◇ アプリケーションは間接的に起動されますか。
- ◆ アプリケーションにはモジュールとファイルがいくつありますか。
  - ◇ アプリケーション内のすべてのモジュール (システム モジュール以外) を所有していますか。
  - ◇ すべてのモジュールのソースがありますか。
- ◆ アプリケーション全体に関心がありますか。それとも一部だけですか。
  - ◇ コントロールしないモジュールのエラーに関心がありますか。
  - ◇ アプリケーションはトランザクションのアプリケーションですか。その場合、アプリケーション全体を監視しますか。それともいくつかのトランザクションだけですか。
  - ◇ アプリケーションでは、ユーザーがコントロールしないコードから渡されたリソースが利用されていますか。

これらの質問に回答したら、DevPartner エラー検出を設定してアプリケーションを監視できます。

監視対象を確認するとき、プログラムのその他の部分がアプリケーションにリソースを提供する場合があることに注意してください。焦点を絞すぎると、選択した分析サブセットとアプリケーションのそれ以外の部分の間で渡されるリソースを失う可能性があることに注意してください。

たとえば、ActiveX コントロールを記述し、テスト コンテナで実行している場合、DLL 内の動作を確認できます。ただし、オブジェクトを誤って呼び出した場合、リソースとインターフェイスのリークが発生することがあります。コントロールだけを監視する場合、エラーは見つかりませんが、コントロールの誤った使用方法によって発生したエラーは見つかりません。

## アプリケーションの起動方法

コンソールまたは Windows アプリケーションを使用している場合、[ファイル]>[開く]を選択してエラー検出を設定し、アプリケーションを監視できます。DevPartner エラー検出ではアプリケーションを開き、アプリケーションに直接リンクされたすべての DLL を分析します。

非従来型のアプリケーションを使用している場合、アプリケーションは以下の2つのカテゴリのいずれかに当てはまります。

- ◆ コントロール プログラムから直接起動されます。
- ◆ システム アクションに基づいて間接的に起動されます。

最初のタイプのアプリケーションには、一部のテスト アプリケーションによって起動される ActiveX コントロールや DLL が含まれます。たとえば、ActiveX コントロールを作成したら、Visual Studio に付属のテスト コンテナ アプリケーション (`tstcon32.exe`) を使用して分析できます。

アプリケーションがシステム アクションによって間接的に起動される場合は、エラー検出の [プロセスを待機] オプションを使用してアプリケーションの起動を待機できます(「[プロセスを待機](#)」(34 ページ) を参照)。以下にこの例を示します。

- ◆ Windows サービス
- ◆ プロセス外の COM サーバー

サービスや COM サーバーなどの多くの専門アプリケーションは、タイム クリティカルです。アプリケーションがタイム クリティカルな場合、最良の結果を得るには、DevPartner エラー検出の使用時にタイムアウト ロジックを無効にします。

## サービスを分析する

DevPartner エラー検出では Windows サービスを監視できます。サービスを監視する場合は、以下の点を考慮してください。

- ◆ サービスはブート時間に起動しますか。オンデマンドで起動しますか。
- ◆ サービスに特定のセキュリティ コンテキストは必要ですか。
- ◆ サービスを対話的に実行できますか。
- ◆ サービスはサービスとしてでなくても実行できますか。
- ◆ サービスにタイミングの問題はありますか。

DevPartner エラー検出では、システムの稼働後に起動できるサービスを分析できます。最良の結果を得るには、デバッグ プロセスをとおしてサービスの起動や停止を手動で行うことができる必要があります。

## 要件とガイドライン

DevPartner エラー検出でサービスを監視するには、実行に使用されるアカウントに管理者権限が必要です。アプリケーションに厳しいタイミングの要件がある場合は、さらに問題が発生することがあります。

## サービスを分析する

DevPartner エラー検出でサービスを分析するには、以下の手順を実行します。

- 1 サービスを停止します。
- 2 シンボルを使用し、最適化しないで (オプションで `FinalCheck` を使用) サービスのデバッグ構成をビルドします。
- 3 エラー検出を使用してサービスのイメージを開き、セッションに合わせて設定を更新します。
- 4 [プログラム]メニューから[プロセスを待機]を選択します。

エラー検出自体が初期化され、セッションをキャンセルするかどうかを確認するダイアログ ボックスが表示されます。

- 5 通常どおり、サービスを開始します。

通常はサービス コントロール マネージャを使用してサービスを開始している場合は、そのように操作します。アプリケーションを起動すると、エラー検出のダイアログ ボックスは閉じます。

## タイミングの問題と `dwWait`

サービスの開始に失敗した場合、または開始したがほとんどすぐに終了した場合は、`SetServiceStatus` に渡された `ServiceStatus` ブロックで `dwWait` パラメータを変更する必要があります。サービスで指定されている値が小さすぎると、Windows サービス コントロール マネージャによってサービスが中止されます。DevPartner エラー検出を使用する場合は、`dwWait` を 4,000,000 などの大きい値に設定します。

メモ: DevPartner エラー検出での作業が終了したあと、`dwWait` の通常値を復元します。

## 代替方式: ワーカー スレッドからのコントロール ロジックの分離

サービスをモジュール方式で作成した場合、ワーカー スレッドからサービス コントロール ロジックを分離できることがあります。1つの方法として、ワーカー スレッド ロジックに関連した単純なコンソール アプリケーションをラップする方法があります。このようにして、DevPartner エラー検出を使用して、サービス ワーカー スレッドを Windows コンソール プログラムであるかのようにチェックできます。

## DevPartner エラー検出ログのオンとオフを切り替えるカスタム コード

対話的でないサービスを処理する場合、カスタム コードを作成して、サービスの実行中に DevPartner エラー検出ログのオンとオフを切り替えることができます。`dwControl` パラメータから `ControlService` に渡すコントロール コードに応答するようにカスタム コードを作成します。

サービス コントロール ロジックで起動および停止のイベント レポート API を呼び出せます。[「条件付きコード」](#) (36 ページ) を参照してください。

## 共通のサービス関連の問題

### サービスが起動するとすぐにハングする

管理者権限でサービスを実行していることを確認します。管理者権限を取得できない場合は、上記の代替方式を行ってください。

## サービスが起動するとすぐに終了する

Windows のサービス コントロール マネージャによってサービスが終了されたことが原因である可能性があります。サービスの初期化ロジックの `dwWait` の値を大きくしてサービスを再実行します。

DevPartner エラー検出に有効な作業フォルダがあることも確認する必要があります。[プログラム]メニューの[設定]にある[全般]の設定を使用して、作業フォルダを指定します。

引き続きこの問題が発生する場合は、上記の代替方式を使用してサービスを変更することを検討してください。

## サービスが実行してしばらくたつと、突然終了する

サービス状態を要求するコントロール メッセージへのサービスの応答が遅すぎる可能性があります。サービス状態の要求に応答する場合は、`dwWait` のタイムアウト値を大きくします。

DevPartner エラー検出によってアプリケーションのメモリが解放時に無効データによってフィルされ、クラッシュすることもあります。エラー検出設定の[メモリの追跡]機能を無効にします。これでクラッシュが解消したら、`FinalCheck` でサービスをインストールし、アプリケーションを再実行して、初期化されていないメモリ リファレンス、バッファ オーバーラン、およびダングリング ポインタを探します。

引き続きこの問題が発生する場合は、上記の代替方式を使用してサービスを変更することを検討してください。

## サービスは正常に実行されるが、シャットダウン時に突然終了する

サービス コントロール マネージャからシャットダウン要求を受け取ったときのサービスの応答時間が制限されています。アプリケーションのシャットダウン時には、DevPartner エラー検出によって、メモリ リーク、リソース リーク、およびインターフェイス リークの検出や、割り当て済みのメモリ ブロックを再チェックすることによるメモリ オーバーランの検出などの数多くのチェックが実行されます。シャットダウン要求に応答するために指定されている `dwWait` 値が小さすぎると、サービス コントロール マネージャによってサービスが中止されます。この場合は、`dwWait` 値を大きくします。

引き続きこの問題が発生する場合は、上記の代替方式を使用してサービスを変更することを検討してください。

## テスト コンテナを使用して ActiveX コントロールを分析する

DevPartner エラー検出を Visual Studio に付属のテスト コンテナ ユーティリティと組み合わせて使用して、ActiveX コントロール、およびテスト コンテナと共に使用できるその他の COM オブジェクトを監視できます。

DevPartner エラー検出をテスト コンテナと組み合わせて使用するには、以下の手順を実行します。

- 1 DevPartner エラー検出を実行します。
- 2 [ファイル]>[開く]を選択し、テスト コンテナを選択します。

Visual Studio を標準のフォルダにインストールした場合、テスト コンテナは以下のいずれかの場所にあります。

```
C:\Program Files\Microsoft Visual Studio 8\Common7\Tools\
TestCon32.exe
```

```
C:\Program Files\Microsoft Visual Studio 9\Common7\Tools\
TestCon32.exe
```

- 3 [モジュールとファイル]設定を選択します。
- 4 **TestCon32.exe** が選択されていないことを確認します。
- 5 [モジュールの追加]をクリックします。
- 6 ActiveXまたはCOMコントロールを含むDLLをモジュールとファイルのリストに追加します。
- 7 コントロールに必要なその他のDLLを追加します。
- 8 アプリケーションを実行します。

テスト コンテナ アプリケーションが起動したら、以下の手順を実行します。

- 1 ツールバーの[新規コントロール]をクリックします。
- 2 表示されたリストからコントロールを追加します (Calendar Control 8.0など)。
- 3 ツールバーの[メソッドの起動]と[プロパティ]ボタンを使用してコントロールを操作します。
- 4 コントロールの実行を終了したら、テスト コンテナを終了します。

実行中、エラーが検出されるとDevPartnerエラー検出によってレポートされます。テスト コンテナの終了時に、実行中にレポートされなかったメモリ、リソース、インターフェイスのリークがDevPartnerエラー検出によってレポートされます。

## 一般的なテスト コンテナの問題

### DevPartner エラー検出でTestCon32.exeのエラーがレポートされる

デフォルトで、DevPartnerエラー検出では、[モジュールとファイル]フォルダまたは[システム]フォルダを使用してDLLとEXEが明示的に除外されていないかぎり、実行ファイル、およびプロセスに関連付けられたすべてのDLL内のエラーがレポートされます。DevPartnerエラー検出で**TestCon32.exe**のエラーがレポートされないようにするには、チェックするモジュールのリストから該当する実行可能ファイルを除外します。

### DevPartner エラー検出COM コール レポートでオブジェクトへのコールがログに記録されない

DevPartnerエラー検出では、認識対象として指定されたCOMインターフェイスのメソッドのみが記録されます。DevPartnerエラー検出にActiveXコントロールについて知らせるには、[COM コール レポート]設定で、[選択したモジュールに実装されたCOMメソッドコールのレポートを有効にする]を選択して、メソッドのログ記録を有効にします。

### DevPartner エラー検出からオブジェクトのCOMインターフェイス リークがレポートされない

COMインターフェイスリーク情報を収集するには、[COMオブジェクトの追跡]の設定で、[COMオブジェクトの追跡を有効にする]を選択します。監視するCOMクラスを選択します。

独自のオブジェクトを追跡するには、[COM オブジェクトの追跡] 設定の COM クラスのリストから、該当するクラスだけを選択します。選択するクラスがわからない場合は、[すべての COM クラス] を選択します。

## COM を使用するアプリケーションを分析する

DevPartner エラー検出では、COM コンポーネントを分析できます。DevPartner エラー検出で COM コンポーネントを分析するには、[コンポーネント サービス] 設定を編集し DevPartner エラー検出を COM コンポーネントのデバッガとして設定する必要があります。

DevPartner エラー検出を COM コンポーネントのデバッガとして設定するには、以下の手順を実行します。

- 1 [スタート]>[設定]>[コントロール パネル]>[管理ツール]>[コンポーネント サービス]の順に選択します。
- 2 [コンポーネント サービス] ウィンドウのツリー コントロールを使用して、[COM アプリケーション] を開きます。
- 3 ツリー コントロールからコンポーネントを選択します。
- 4 コンポーネントを右クリックして、[プロパティ] を選択します。
- 5 コンポーネントのプロパティ シートで、[詳細設定] タブをクリックします。
- 6 [詳細設定] タブで、[デバッガ内で実行する] を選択します。

**ヒント：** `dllhost.exe` が削除されるのを避けるには、[参照] をクリックするのではなく、パスを切り取って貼り付けるか、入力します。

- 7 デバッガのパスを変更して、`bc.exe` を示します。フル パスを入力します。DevPartner エラー検出のインストール時にデフォルトのパスを選択した場合、このパスは以下のようになります。

**C:\Program Files\Microsoft Focus\DevPartner Studio\BoundsChecker\bc.exe**

64ビットバージョンの Windows では、DevPartner エラー検出は以下の場所にインストールされます。**Program Files (x86)\Microsoft Focus\DevPartner Studio\BoundsChecker\bc.exe**

**メモ：** デバッガのパスの最後から `dllhost.exe /ProcessID:{…}` を削除しないでください。

- 8 [OK] をクリックして変更を保存します。

DevPartner エラー検出をコンポーネントのデバッガとして設定したあと、以下の手順を実行します。

- 1 以下のいずれかの方法で、コンポーネントを起動します。
  - ◇ コンポーネントを使用するアプリケーションを実行します。
  - ◇ [コンポーネント サービス] を使用してアプリケーションを起動します。
    - ツリー コントロールからコンポーネントを選択します。
    - コンポーネントを右クリックして、[スタート] を選択します。
- 2 DevPartner エラー検出の起動時に、使用する設定を選択し、エラー検出の実行を開始します。

- メモ：** COM コンポーネントのエラーとイベントだけを表示するには、DevPartner エラー検出の[モジュールとファイル]設定でモジュールのリストから `dllhost.exe` とその他の DLL を削除します。
- 3 コンポーネントの実行を終了したら、コンポーネントをシャットダウンします。以下の手順に従ってください。
    - a [コンポーネント サービス]ウィンドウで、ツリー コントロールからコンポーネントを選択します。
    - b コンポーネントを右クリックして、[シャットダウン]を選択します。

DevPartner エラー検出によって、通常のプロセス終了時のエラー検出とリーク検出が実行されます。
  - 4 デバッグが終了したら、[デバッガ内で実行する]チェック ボックスをオフにします。
    - a [コンポーネント サービス]ウィンドウのツリー ビューでコンポーネントを選択します。
    - b コンポーネントを右クリックして、[プロパティ]を選択します。
    - c プロパティ シートの[詳細設定]タブをクリックして、[デバッガ内で実行する]をオフにします。
    - d [OK]をクリックします。

## 一般的な COM の問題

### DevPartner エラー検出で `dllhost.exe` のエラーがレポートされる

デフォルトで、DevPartner エラー検出では、[モジュールとファイル]フォルダまたは[システム]フォルダを使用して DLL と EXE が明示的に除外されていないかぎり、実行ファイル、およびプロセスに関連付けられたすべての DLL 内のエラーがレポートされます。DevPartner エラー検出で `dllhost.exe` のエラーがレポートされないようにするには、チェックするモジュールのリストから該当する実行可能ファイルを除外します。

### DevPartner エラー検出 COM コール レポートでオブジェクトへのコールがコンポーネントに記録されない

DevPartner エラー検出では、認識できるインターフェイスの COM メソッド コールのみが記録されます。[COM コール レポート]設定で、[選択したモジュールに実装された COM メソッド コールのレポートを有効にする]を選択して、メソッドのログ記録を有効にします。

### DevPartner エラー検出からコンポーネントの COM インターフェイス リークがレポートされない

DevPartner エラー検出では、[COM オブジェクトの追跡]設定で[COM オブジェクトの追跡を有効にする]を選択した場合にのみ COM インターフェイス リーク情報がレポートされます。また、監視対象の COM クラスも指定する必要があります。

ユーザーのインターフェイスのみを追跡するには、[COM オブジェクトの追跡]設定の COM クラスのリストを確認し、ユーザーのクラスを選択してその他をすべてクリアします。選択するクラスがわからない場合は、[すべての COM クラス]を選択します。

### コンポーネントを実行した後 DevPartner エラー検出が長時間応答しない

DevPartner エラー検出は、`dllhost.exe` がタイムアウトし、プロセスを終了するまで待機します。`dllhost.exe` が終了すると、DevPartner エラー検出ではメモリ リーク、リソース リーク、およびインターフェイス リークの最終的な検出が行われます。

`dllhost.exe`がタイムアウトする前に終了するには、[コンポーネント サービス]ウィンドウでコンポーネントを見つけ、コンポーネントを右クリックして[シャットダウン]を選択します。

### [プロセスを待機]を使用して `dllhost.exe` をデバッグする

`dllhost.exe` をデバッグする場合は、[プロセスを待機]を使用しないでください。DevPartner エラー検出でサポートされている Windows オペレーティング システムで作成されるコンポーネントの数を考慮すると、コンポーネント サービス デバッグ オプションを使用して、COM によって提供されるサポートされているメカニズムを使用するほうが安全です。

サポートされているメカニズムを使用しないと、その他の COM コンポーネントが要求された場合に予想外のシステム障害が発生することがあります。`dllhost.exe` のすべてのインスタンスを DevPartner エラー検出に関連付けるため、コンポーネントが正常に起動しない可能性があります。

## IIS 5.0 の ISAPI フィルタを分析する

DevPartner エラー検出を使用して、IIS プロセス内の ISAPI フィルタを分析できます。DevPartner エラー検出で ISAPI フィルタを分析するには、以下の手順を実行します。

- 1 シンボルを使用し、最適化しないで（オプションで FinalCheck を使用）デバッグ構成がある ISAPI フィルタをビルドします。
- 2 Internet Information Server (IIS) サービスを停止します。
- 3 `inetinfo.exe` のエラー検出を構成します。
  - a エラー検出アプリケーション (`bc.exe`) で `inetinfo.exe` を開きます。  
`inetinfo.exe` は以下の場所にあります。  
  
`%WINDIR%\System32\Inetsrv\inetinfo.exe`
  - b [オプション]または[設定]の下の[モジュールとファイル]を開いて、すべての EXE と DLL をクリアします。
  - c [モジュールの追加]をクリックして、モジュールのリストに ISAPI フィルタを追加します。
  - d 残りの設定を ISAPI フィルタに適した設定に更新します。
- 4 [アプリケーション保護]モードの[高(分離プロセス)]を使用するためにテストする ISAPI 拡張機能が含まれる仮想ディレクトリを設定します。
  - a Internet Information Services マネージャを開きます。
  - b 仮想ディレクトリまで移動します。
  - c 右クリックして、[プロパティ]を選択します。
  - d [仮想ディレクトリ]タブの[アプリケーション保護]を[高(分離プロセス)]に設定します。
- 5 [プログラム]メニューから[プロセスを待機]を選択します。  
エラー検出が、IIS を使用するように初期化されて、IIS の開始を待機します。
- 6 [サービス]コントロールパネルから IIS Admin サービスを開始します。

- 7 IIS サーバーへの一連の HTTP 要求を生成し、ISAPI フィルタを実行します。
- 8 ISAPI フィルタの実行を終了したあと、サービス コントロール パネルを使用して IIS サービスを停止します。
- 9 エラー検出によって、プロセス終了時のエラー検出とリーク検出が実行されます。

## 一般的な ISAPI フィルタの問題

ISAPI フィルタのデバッグに関連する一般的な問題の多くについては、すでにサービスの一般的な問題で説明しました。

以下の問題は、IIS と ISAPI のフィルタのデバッグに固有のものです。

### IIS が起動してすぐにハングする

DevPartner エラー検出でサービスをデバッグするには、管理者権限が必要です。管理者権限のないアカウントを使用すると、IIS は応答を停止するか、エラーで終了します。

### DevPartner エラー検出ログに不要な情報が含まれている

[モジュールとファイル]設定を使用して、`inetinfo.exe` および ISAPI フィルタ以外のすべての DLL を実行します。

`inetinfo.exe` を最初に実行するとき、DevPartner エラー検出では、プロセスに動的にロードされたすべての DLL が自動的にモジュールとファイルのリストに追加されます。[モジュールとファイル]設定ダイアログを使用して、不要な DLL をすべてクリアします。不要な DLL をリストから削除しないでください。リストから削除すると、再びリストに追加され、次回の実行中に有効になります。

### デバッグ サービスと ISAPI のフィルタに関するその他の情報源

- ◆ IIS と ISAPI のフィルタのデバッグ手法について説明している多数の優れた記事を MSDN で参照できます。
- ◆ 当社の Web サイトでは多数のサポート技術情報を参照できます。

### DevPartner エラー検出と対話的にデバッグするためのヒント

- ◆ 管理者権限でアカウントにログインする必要があります。
- ◆ この提案で問題が解決されない場合は、Microsoft テクニカル ノート 63:「ISAPI アプリケーションのデバッグ」を確認してください。

<http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/bewb5yw3.aspx>

## IIS 6.0 の ISAPI フィルタを分析する

IIS 6.0 を以下のいずれかの方法で設定している場合、DevPartner エラー検出を使用して ISAPI フィルタを分析できます。

- ◆ IIS 5.0 プロセス分離モード
- ◆ IIS 6.0 デフォルト構成

ISAPI フィルタを DevPartner エラー検出で分析するには、まず最適化しないで (オプションで `FinalCheck` を使用) [デバッグ] で ISAPI フィルタをビルドします。次に、使用している IIS 構成の手順に従います。

## IIS 5.0 プロセス分離モード

IIS 6.0をIIS 5.0プロセス分離モード構成で実行する場合、DevPartnerエラー検出をinetinfo.exe 実行可能ファイルに対して実行します。

ISAPIフィルタを分析するには、以下の手順を実行します。

- 1 **inetinfo.exe** のエラー検出を構成します。
  - a エラー検出アプリケーション (**bc.exe**) で **inetinfo.exe** を開きます。  
**inetinfo.exe** は以下の場所にあります。  
  
%WINDIR%\System32\Inetsrv\inetinfo.exe
  - b **[オプション]** または **[設定]** の下の **[モジュールとファイル]** を開いて、すべての EXE と DLL をクリアします。
  - c **[モジュールの追加]** をクリックして、モジュールのリストに ISAPI フィルタを追加します。
  - d 残りの設定を ISAPI フィルタに適した設定に更新します。
- 2 **[アプリケーション保護]** モードの **[高 (分離プロセス)]** を使用するためにテストする ISAPI 拡張機能が含まれる仮想ディレクトリを設定します。
  - a IIS Admin ユーティリティを開きます。
  - b 仮想ディレクトリまで移動します。
  - c 右クリックして、**[プロパティ]** を選択します。
  - d このダイアログ ボックスの **[仮想ディレクトリ]** タブの **[アプリケーション保護]** を **[高 (分離プロセス)]** に設定します。
- 3 **[コントロール パネル]** の **[サービス]** ダイアログ ボックスを開きます。
- 4 **[プログラム]** メニューから **[プロセスを待機]** を選択します。  
エラー検出が、IIS を使用するように初期化されて、IIS の開始を待機します。
- 5 **IIS Admin** サービスと **World Wide Web Publishing** サービスを開始します。  
  
DevPartner エラー検出では、**inetinfo.exe** プロセスと ISAPI フィルタの監視が開始されます。
- 6 Web サーバーへの一連の HTTP 要求を生成し、ISAPI フィルタを実行します。
- 7 ISAPI フィルタの実行を終了したあと、IIS マネージャを使用して IIS を停止します。  
  
**[シャットダウン中]** ダイアログ ボックスが開いたら、**[今すぐ終了]** をクリックします。これにより、**inetinfo.exe** プロセスが停止します。

**メモ:** DevPartner エラー検出で **[停止]** ボタンをクリックすると、DevPartner エラー検出と **inetinfo.exe** プロセスの両方が終了し、収集したデータが消失します。

エラー検出によって、プロセス終了時のエラー検出とリーク検出が実行されます。

## IIS 6.0 デフォルト構成

IIS 6.0をデフォルト構成モードで実行する場合、DevPartnerエラー検出をw3wp.exe実行可能ファイルに対して開始します。

ISAPIフィルタを分析するには、以下の手順を実行します。

- 1 w3wp.exeのエラー検出を構成します。
  - a エラー検出アプリケーション (bc.exe) でw3wp.exeを開きます。  
w3wp.exeは以下の場所にあります。  

```
%WINDIR%\System32\Inetsrv\w3wp.exe
```
  - b [オプション]または[設定]の下の[モジュールとファイル]を開いて、すべてのEXEとDLLをクリアします。
  - c [モジュールの追加]をクリックして、モジュールのリストにISAPIフィルタを追加します。
  - d 残りの設定をISAPIフィルタに適した設定に更新します。
- 2 テスト対象のISAPI拡張機能を含む仮想ディレクトリに対し、MSSharePointAppPoolを使用するように設定します。
  - a **Internet Information Server (IIS)** マネージャを開きます。
  - b 仮想ディレクトリまで移動します。
  - c 右クリックして、[プロパティ]を選択します。
  - d [仮想ディレクトリ]タブの[アプリケーションプール]をMSSharePointAppPoolに設定します。
- 3 [プログラム]メニューから[プロセスを待機]を選択します。  
エラー検出が、IISを使用するように初期化されて、IISの開始を待機します。
- 4 **IIS Admin** サービスと **World Wide Web Publishing** サービスを開始します。  
エラー検出では、w3wp.exeプロセスとISAPIフィルタの監視が開始されます。
- 5 Webサーバーへの一連のHTTP要求を生成し、ISAPIフィルタを実行します。
- 6 ISAPIフィルタの実行を終了したあと、IIS マネージャを使用してIISを停止します。  
[シャットダウン中]ダイアログボックスが開いたら、[今すぐ終了]をクリックします。  
これにより、w3wp.exeプロセスが停止します。

メモ： DevPartnerエラー検出で[停止]ボタンをクリックすると、エラー検出とw3wp.exeプロセスの両方が終了し、収集したデータが消失します。

エラー検出によって、プロセス終了時のエラー検出とリーク検出が実行されます。

### 一般的なIIS 6.0 ISAPIフィルタの問題

IIS 5.0一般的なISAPIフィルタの問題のセクションのすべての項目が当てはまります。いくつかの例では、inetinfo.exeをw3wp.exeに置き換える必要があります。

「[一般的なISAPIフィルタの問題](#)」(46ページ)を参照してください。

以下の新しい問題は IIS 6.0 に当てはまります。

- ◆ Microsoft では、IIS 6.0 のデフォルト構成をより安全なものに再設計しました。この変更の一部として、ISAPI 拡張機能がデフォルトで無効に設定されるようになりました。ISAPI 拡張機能をデバッグするには、IIS 管理ツールの [Web サービス拡張] タブを開いて、不明な ISAPI 拡張機能を有効にするように IIS を変更してください。
- ◆ IIS マネージャ ツールを使用して、IIS の起動、停止、再起動を行います。これらの操作を実行するには、ツリーで <MachineName> ノードを右クリックし、[All Tasks]->[Restart IIS] を選択します。これによってダイアログ ボックスが開き、そこから IIS の起動と停止を制御できます。
- ◆ 最良の結果を得るには、IIS を監視する前に API コール ログなどのログ機能をオフにします。ログ機能をオンにすると、DevPartner エラー検出では非常に大きいログ (.DPBcl) ファイルが作成されるため、IIS サーバーのパフォーマンスに影響を与えます。

**メモ：** 全般ダイアログの [イベントをログに記録] をオフにしないでください。[イベントをログに記録] が無効になっているかぎり、エラー検出では何もレポートされません。この機能は、メニュー バー ボタンからイベント ログを明確に有効にするまですべてのレポートを抑制する場合にのみ使用します。

## よく寄せられる質問 (FAQ)

### DevPartner エラー検出の ActiveCheck と FinalCheck またはテクノロジーの違い

DevPartner エラー検出には、以下の2つの操作モードがあります。

- ◆ **ActiveCheck**—このモードでは、DevPartner エラー検出は32ビット Windows プログラムで動作し、オペレーティング システムと C ランタイム ライブラリへのすべてのコールをインターセプトして、メモリ リーク、リソース リーク、および無効な（または解放された）関数に渡されたポインタの使用を探します。
- ◆ **FinalCheck**—このモードでは、DevPartner エラー検出 FinalCheck インストールメンテーション ロジックを使用して C または C++ プログラムを再コンパイルする必要があります。FinalCheck を使用してビルドするには、[DevPartner]>[ネイティブ C/C++ インストールメンテーション マネージャ] をクリックします。

FinalCheck インストールメンテーションでは、DevPartner エラー検出ですべてのポインタのフェッチ、保存、またはインストールするモジュール内での間接的な発生を監視できます。DevPartner エラー検出では範囲に出入りする変数も監視できます。

**メモ：** 評価順序が正しく定義されていないコードをインストールすると、不正なデータ、ハング、クラッシュなどの予期しない結果が生じることがあります。

**「C と C++ では基本的に、変数への書き込みもしている1つの式の中で変数を2回読んだ結果は未定義です」** -Bjarne Stroustrup

C/C++ 標準では、オブジェクトへの値の格納など、「副作用」がある場合の評価順が明確に定義されていません。たとえば、以下のステートメントの評価順序はあいまいです。i = ++i + 2;

このステートメントには、変数 *i* に値を保存する部分が2か所ありますが、この言語ではそれらの実行順序が定義されていません。このようなコードをインストールした場合は、評価順序が固定ではないため、結果が予測できない可能性があります。

FinalCheckモードで実行する場合も、すべてのActiveCheck分析は拡張FinalCheck分析と共に実行されることに注意してください。

FinalCheckは、ダングリングポインタ、二重解放、ポインタオーバーラン、未初期化メモリエラー、割り当てられていないメモリへの読み取り／書き込みの検出に特化しています。

### **コールバリデーションを有効にするタイミング**

コールバリデーションを有効にすると、DevPartnerエラー検出によってプログラムのより多くのメモリエラーとポインタエラーが検出されます。検出されるイベントが大量になる可能性があるため、この機能はデフォルトでオフになっています。

### **[コールバリデーション]で[メモリブロックチェックを有効にする]機能を選択した場合のDevPartnerエラー検出の動作**

[メモリブロックチェックを有効にする]（デフォルトでは無効）を選択すると、DevPartnerエラー検出ではより詳細なActiveCheck分析が実行されます。この機能によってDevPartnerエラー検出の実行速度が20%遅くなる場合があることに注意してください。

### **[メモリの追跡]のDevPartnerエラー検出[保護バイト]設定の使用法**

[メモリの追跡]設定の[保護バイト]設定を変更するには、まず[保護バイトを有効にする]がオンになっていることを確認します。

[回数]を4から8や16の大きい値に増やします。

保護バイトの数を多くすると、ヒープブロック間の間隔が広くなり、DevPartnerエラー検出でオーバーランを監視するためのブロック間の領域が提供されます。

[実行時のヒープブロックチェック]の設定を[適応分析の使用]または[すべてのメモリAPIコール時]に変更します。

このオプションでは、メモリ機能呼び出すたびにDevPartnerエラー検出で各ヒープブロックを検証するように指定します。これによりプログラムの実行速度は遅くなりますが、ヒープ破壊がプログラムの限定的な領域に分離されるため、追跡が容易になります。

## 第4章

# ユーザーが作成したアロケータの使用

この章では、ユーザー作成のメモリ アロケータを実装する方法について説明します。

## 概要

DevPartner エラー検出では、ユーザー作成のメモリ アロケータに対するメモリ分析を実行できます。これを行うには、メモリ アロケータの記述を **UserAllocators.dat** という名前のテキストファイルに追加します。このファイルは、DevPartner エラー検出インストール フォルダの `data` フォルダにインストールされています。ユーザー作成のアロケータをこのファイルに追加すると、DevPartner エラー検出によって、オペレーティング システムで提供されるメモリ割り当てルーチンと同様に、アロケータが処理されます。DevPartner エラー検出によって、**UserAllocators.dat** 内に記述されたユーザー作成のアロケータが原因で発生したリークが検出された場合は、そのユーザー作成のアロケータ内の低水準アロケータではなく、ユーザー作成のアロケータ自体が [検出されたプログラム エラー] ダイアログ ボックスに表示されます。

## 必要な情報を収集する

ユーザー作成のアロケータを **UserAllocators.dat** に追加する前に、以下の情報を収集する必要があります。

- 1 ユーザー作成のアロケータの割り当て関数、解放関数、再割り当て関数、およびサイズ関数の正確な名前。
- 2 ユーザー作成のメモリ アロケータが静的にリンクされているか、または別のモジュール (DLL) で提供されているかを確認します。
- 3 ユーザー作成のアロケータを含むモジュール (DLL) の名前。
- 4 ルーチンに対するパラメータを調べて、ブロックのサイズ、およびメモリ ブロックに関連付けられたポインタが渡されるか、呼び出し側に返されるかを確認します。
- 5 解放されたブロックにデータを格納する割り当て、またはユーザー作成のアロケータでメモリをゼロにするなどの、アロケータにおける特殊な前提。

## ユーザーが作成したアロケータの名前を検索する

**UserAllocators.dat** にレコードを追加するには、割り当て関数、解放関数、再割り当て関数、およびサイズ関数の正確な名前を入力する必要があります。

ルーチンの名前を検索するには、以下の手順を実行します。

- 1 以下の関数の名前を確認します。
  - ◇ 割り当て関数 (`malloc`、`calloc`、`new` など)
  - ◇ 解放関数 (`free` または `delete`)

- ◇ 再割り当て関数 (realloc や realloc など)
- ◇ メモリ ブロック サイズ関数 (\_msize など)

## 2 考慮する状況として、以下の2つの基本的なケースがあります。

- ◇ 定義している関数を含むモジュールのシンボル (pdb ファイル) があります。

pdb ファイルを使用できる場合は、内部シンボルを使用できます。短縮または展開された関数名を検索するには、モジュールのコンパイル時にリンカ/デバッガ オプションを使用して、マップ ファイルを作成します。次に、マップ ファイルの **Publics by Value** セクションを調べて、関数の名前を確認します。この方法では、userAllocator 関数定義に `Static` キーワードが必須となります。

- ◇ シンボルがない、またはシンボルが無効です。

pdb ファイルを使用できない場合は、Visual Studio のコマンド プロンプトで `dumpbin / exports yourlibrary.dll` と入力します。出力に表示された関数名を使用します。

割り当て関数の名前は、使用される呼び出しルールと言語の選択によって、短縮されている場合と短縮されていない場合があります。C++ を使用している場合、名前はしばしば短縮されません。以下の小さい C++ プログラムについて検討してください。

```
#include <malloc.h>
#include <memory.h>

class SampleClass
{
public:
SampleClass(){}
void *operator new( size_t stAllocateBlock );
void operator delete( void * pBlock);
};
void *SampleClass::operator new( size_t stAllocateBlock )
{
void *pvTemp = malloc( stAllocateBlock );
if( pvTemp != 0 )
memset( pvTemp, 0, stAllocateBlock );
return pvTemp;
}
void SampleClass::operator delete(void * pBlock)
{
free(pBlock);
return;
}
int main(int argc, char * argv[])
{
SampleClass *pClass = new SampleClass;
return 0;
}
```

アプリケーションをビルドする前に、Visual Studio の [プロジェクト] 設定で **Generate マップ ファイル** を選択します。アプリケーションをビルドしたら、マップ ファイルを開き、`new` 演算子と `delete` 演算子のメソッドを検索します。メソッドは以下のようなものです。

```
global operator new:??2SampleClass@@SAPAXI@Z
```

```
global operator delete:??3SampleClass@@SAXPAX@Z
```

これらの演算子は、**UserAllocators.dat** に以下のように記述できます。

#### Allocator

```
Module=myModule
Function=??2SampleClass@@SAPAXI@Z
MemoryType=MEM_CUSTOM1
NumParams=1
Size=1
NoFill Static Debug
```

#### Deallocator

```
Module=myModule
Function=??3SampleClass@@SAXPAX@Z
MemoryType=MEM_CUSTOM1
NumParams=1
Address=1
Static Debug
```

### ユーザー作成のアロケータによるメモリに関する特殊な前提

通常、DevPartner エラー検出では、ユーザー プログラムにポインタを返す前に、割り当てられたメモリに充てんパターンがフィルされ、メモリのブロックが解放されたあと、そのブロックに無効データがフィルされます。

メモリ アロケータによってブロックが特殊なデータで初期化される場合は、ブロックを上書きしてデータを失うことがないように、**NOFILL** フラグを使用します。

メモリ アロケータで、ブロックが解放されたあとにそのブロックから読み取りできることが前提となっている場合は、**NOPOISON** フラグを使用します。「無効データのフィル」が発生しないようにする理由には、以下のようなさまざまなものがあります。

- ◆ 割り当てステータスを追跡する、別の解放されたブロックにリンクする、などの目的で、メモリ アロケータによってデータが解放されたブロックに保存される。
- ◆ アプリケーションで、解放されたブロックは再割り当てされるまで引き続き参照可能であるとみなされている。解放されたブロックを参照し続けるのは危険ですが、解放されたブロックを参照する多くのアプリケーションが現在も使用されています。

## UserAllocators.dat でエントリを作成する

「必要な情報を収集する」(51 ページ) で説明した情報を収集したら、**UserAllocators.dat** でアロケータを記述できます。

関数を記述するには、関数ごとに1つのレコードをファイル内に作成します。各レコードは以下の形式に従います。

```
Record_Type Parameter_1 Parameter_2 Etc...
```

**Record\_Type** は、作成している関数のタイプを示します。あとに続くパラメータでは、アロケータ関数についての詳細情報を提供します。

レコードを作成する場合、各フィールドを1つまたは複数のスペースかタブ文字で区切ります。レコードは複数行にわたって記述できます。

表4-1 に、現在定義されているレコード タイプを示します。

表4-1. レコード タイプ

レコード タイプ	説明
Allocator	メモリを割り当てる関数。
Deallocator	メモリを解放する関数。
QuerySize	以前アロケータ関数によって割り当てられた特定のメモリ ブロックのサイズをクエリできる関数。
Reallocator	以前アロケータ関数によって割り当てられたメモリ ブロックのサイズを調整できる関数。 リアロケータ関数では、メモリの同じブロックが返される場合と返されない場合があることに注意してください。
Ignore	DevPartner エラー検出で無視する (メモリを追跡しない) アロケータ関数またはリアロケータ関数。

## モジュール

各 UserAllocator レコード タイプで、記述されている関数を含むモジュールを指定する必要があります。以下の3種類のモジュールを記述できます。

表4-2. モジュール タイプ

モジュール タイプ	説明
名前付きモジュール	ユーザー割り当て関数またはメソッド ( <b>foo.dll</b> など) を含む、明示的に名前が付けられたモジュール (DLL)。 <b>メモ:</b> モジュール名では、ワイルドカードは使用できません。

表4-2. モジュール タイプ (続き)

モジュール タイプ	説明
静的にリンクされた ユーザー アロケータ	<p>ユーザー割り当て関数またはメソッドを含む、明示的に名前が付けられたモジュール (DLLまたは実行ファイル)。ただし、この場合、関数またはメソッドは元はライブラリ (.lib ファイル) の一部でした。モジュールにリンクすると、カスタマ コードで関数やメソッドを参照できますが、これらの関数やメソッドは外部からは見えません。モジュールのデバッグ シンボルを指定し、オプションのSTATIC キーワードを使用して、デバッグ シンボル内の関数やメソッドを検索するように DevPartner エラー検出に警告します。</p> <p><b>メモ:</b> レコードのオプションのパラメータにSTATIC キーワードを含めない場合、DevPartner エラー検出によってユーザー作成の割り当て関数やメソッドが正しく監視されません。</p>
*CRT	<p>これは、アプリケーションで関数が見つかった場合は常に参照できる特殊なケースです。</p> <p><b>メモ:</b> *CRTの*はワイルドカード文字ではありません。</p> <p>*CRTは、以下の3つのケースを対象とします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Microsoft C Runtime Library</li> <li>• 静的にリンクされたCランタイム ライブラリ</li> <li>• ユーザーがパッチしているすべてのものと同じ短縮名を持つすべてのユーザー関数 (global operator newなど)</li> </ul>

## アロケータ レコード

アロケータ レコードを作成して、メモリを割り当てる関数を記述します。以下の形式に従います。

```
Allocator Module=module_name Function=func_name MemoryType=mem_type
NumParams=param_num Size=size_value [Count=count_num]
[BufferLoc=buffer_loc] [Optional Parameters]
```

**メモ:** デフォルトで、指定された関数の戻り値は、割り当てられたブロックのアドレスになります。BufferLocパラメータを指定すると、この動作を変更して、割り当てられたブロックのアドレスがパラメータに返されるように指定できます (UserAllocators.dat ファイル内のMAPIAllocateBufferを参照してください)。

DevPartner エラー検出では、割り当てられたブロックのアドレスが見つかる予想した場所がコール後にNULLである場合 (戻り値またはBufferLocで指定されたパラメータの値)、割り当ては失敗したとみなされます。

表4-3. アロケータ レコード パラメータ

パラメータ	説明
Allocator	レコードの最初のパラメータはAllocatorという単語にして、割り当てルーチンを記述していることを示す必要があります。
module_name	ユーザー作成のアロケータを含むモジュール（実行ファイルまたはDLL）の名前。 <b>メモ</b> ：モジュール名では、ワイルドカードは使用できません。
func_name	ユーザー作成のアロケータ内のメモリのブロックを割り当てる関数の名前。C++を使用している場合は、関数の「短縮」名にする必要があります。 このパラメータでは、大文字と小文字が区別されます。
mem_type	このパラメータは、割り当てるメモリの種類を記述する場合に使用します。現在のDevPartnerエラー検出では、以下のメモリの種類が定義されています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>MEM_MALLOC malloc、calloc、strdupなどのルーチンから返されるメモリのブロック。この種類のメモリは、Cランタイム ライブラリ解放ルーチンのようなルーチンを使用して解放されます。</li> <li>MEM_NEW new 演算子から返され、delete 演算子によって解放されるメモリのブロック。</li> <li>MEM_CUSTOM1～MEM_CUSTOM9 特定のデアロケータと組み合わせる必要のあるメモリのブロック。この種類を使えば、開発者は、上述した標準メモリ アロケータに影響を及ぼさない独自のカスタム メモリ アロケータを宣言することができます。</li> </ul> DevPartner エラー検出では、特定のメモリの種類で割り当てられたメモリのブロックが同じ種類の関数で解放されるかどうかを検証されます。種類が一致しない場合、DevPartner エラー検出では、実行時にメモリ競合エラーが表示されます。
param_num	関数に渡されるパラメータの数。この値は1～32にする必要があります。 ユーザー作成のアロケータ関数の記述に使用するパラメータの数を指定します。正しい数を指定しなかった場合は、予期せぬ結果が生じる可能性があります。
size_value	割り当てるブロックのサイズを含むパラメータの番号。最初のパラメータの番号は1です。

表4-3. アロケータ レコード パラメータ

パラメータ	説明
count_num	このオプション パラメータは、sizeパラメータと count パラメータを受け取る calloc のような関数の記述に使用します。割り当てるサイズに必要なブロック数を指定します。このパラメータを省略した場合は、1とみなされます。
buffer_loc	割り当てるブロックのアドレスを保持するアドレスを含むパラメータの番号。最初のパラメータの番号は1です。
[Optional Parameters]	レコードの最後に、以下のオプションのパラメータを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>DEBUG</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、フックについての詳細情報が表示されます。出力ウィンドウ（または dbgview）に、フックを設定しようとして発生したエラーに関する情報が表示されます。また、通知情報ペインに、フックが成功した関数やフックされた関数が呼び出された回数などの各フックに関する統計値が表示されます。</li> <li>• <b>NODISPLAY</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、要求された各フックの詳細情報が通知情報ペインの上部に表示されません。</li> <li>• <b>NOFILL</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、返されたバッファが DevPartner エラー検出の「fill」文字列でフィルされません。 <b>メモ</b>：calloc のように、ユーザー作成のアロケータによってブロックがデータで初期化される場合には、NOFILL を指定してデータが破損されないようにします。</li> <li>• <b>NOGUARD</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、この割り当て関数によって作成されたブロックの最後に保護バイトが追加されません。</li> <li>• <b>STATIC</b> DevPartner エラー検出によって、ユーザー作成のアロケータが静的にパッチされます。ユーザー作成のアロケータをアプリケーションにリンクして、インターフェイスをエクスポートした別の DLL の中で使用しない場合は、static オプションを指定します。</li> </ul>

## アロケータ レコードのサンプル

以下は、仮定のアロケータ レコード関数の例です。

## 例1

この例では、関数 `mallocXX` は `MyAlloc.dll` というライブラリにあります。この関数は、最初のパラメータでサイズを渡される1つのパラメータを含む `malloc` タイプの演算子であると想定されます。DevPartner エラー検出では、アプリケーション プログラムに返す前にメモリ ブロックをフィルできません。すべての `MEM_MALLOC` タイプの関数は、この関数によって割り当てられたブロックを解放できます。

```
Allocator Module=MyAlloc.dll Funtion=mallocXX
MemoryType=MEM_MALLOC NumParams=1 Size=1 NOFILL
```

## 例2

この例は、Microsoft `iostream` コードのカスタム グローバル演算子 `new` の追跡に使用されるファイルのものです。この関数は C ランタイム ライブラリにあることに注意してください。レコードではモジュール名として `*CRT` が指定されます。このため、DevPartner エラー検出では、関数が Microsoft C または C++ ランタイム ライブラリのいずれかにあると想定されます。

この関数には、サイズが最初のパラメータに保存された4つのパラメータがあります。DevPartner エラー検出では、メモリを要求するプログラムに返す前にブロックをフィルできません。

```
Allocator Module=*CRT Function=???2@YAPAXIHPBDH@Z
MemoryType=MEM_NEW NumParams=4 Size=1
```

## 例3

この例は、サイズを最初のパラメータで渡される1つのパラメータがある `CustomAllocXX` という関数を示しています。

DevPartner エラー検出では、アプリケーション プログラムに返す前にバッファをフィルできません。このレコードでは、`MemoryType` として `MEM_CUSTOM1` が指定されていることに注意してください。DevPartner エラー検出では、この関数で割り当てられたメモリが、同じ `MEM_CUSTOM1` タイプのルーチンによって解放されるかどうかを検証されます。別の解放ルーチンを使用すると、メモリの解放後に割り当て競合メッセージが生成されます。

```
Allocator Module=foo.dll Function=CustomAllocXX
MemoryType=MEM_CUSTOM1 NumParams=1 Size=1 NOFILL
```

## 例4

この例では、`MyAlloc` という関数が `.LIB` ファイルとしてビルドされ、`DataStore.dll` というデータ収集コンポーネントに静的にリンクされます。`MyAlloc` には、4つのパラメータがあります。最初のパラメータはデータ レコードのサイズ、2番目のパラメータは1つのブロックで割り当てられるレコードの数です。3番目のパラメータは、割り当てるブロックのアドレスを保持する場所のアドレスを含みます。アプリケーションから取得されたメモリはあらかじめ初期化されているため、DevPartner エラー検出では、ブロックをフィルできません。

```
Allocator Module=DataStore.dll Function=MyAlloc BufferLoc=3
MemoryType=MEM_MALLOC NumParams=4 Size=1 Count=2
NOFILL STATIC
```

**メモ：** 関数名が DLL からエクスポートされていない場合は、`STATIC` を指定する必要があります。

## デアロケータ レコード

デアロケータ レコードを作成して、メモリを解放する関数を記述します。以下の形式に従います。

```
Deallocator Module=module_name Function=func_name MemoryType=mem_type
NumParams=param_num Address=address_value [Optional Parameters]
```

表4-4. デアロケータ レコード パラメータ

パラメータ	説明
Deallocator	レコードの最初のパラメータはDeallocatorという単語にして、解放ルーチンを記述していることを示す必要があります。
module_name	ユーザー作成のアロケータを含むモジュール（実行ファイルまたはDLL）の名前。 <b>メモ</b> ：モジュール名では、ワイルドカードは使用できません。
func_name	ユーザー作成のアロケータ内のメモリのブロックを解放する関数の名前。C++ を使用している場合は、関数の「短縮」名にする必要があります。 このパラメータでは、大文字と小文字が区別されます。
mem_type	このパラメータは、解放されるメモリの種類を記述するメカニズムを提供します。現在のDevPartner エラー検出では、以下のメモリの種類が定義されています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>MEM_MALLOC malloc、calloc、strdupなどのルーチンから返されるメモリのブロックを記述します。この種類のメモリは、Cランタイム ライブラリ解放ルーチンのようなルーチンを使用して解放されます。</li> <li>MEM_NEW new 演算子から返され、delete 演算子によって解放されるメモリのブロックを記述します。</li> <li>MEM_CUSTOM1～MEM_CUSTOM9 特定のデアロケータと組み合わせる必要のあるメモリのブロックを記述します。この種類を使えば、開発者は、上述した標準メモリ アロケータに影響を及ぼさない独自のカスタム メモリ アロケータを宣言することができます。 DevPartner エラー検出では、特定のメモリの種類で割り当てられたメモリのブロックが同じ種類の関数で解放されるかどうかを検証されます。種類が一致しない場合、DevPartner エラー検出では、実行時にメモリ競合エラーが表示されます。</li> </ul>
param_num	関数に渡されるパラメータの数。この値は1～32にする必要があります。 ユーザー作成のアロケータ関数の記述に使用するパラメータの数を指定します。正しい数を指定しなかった場合は、予期せぬ結果が生じる可能性があります。

表4-4. デアロケータ レコード パラメータ

パラメータ	説明
address_value	解放されるブロックへのポインタを含むパラメータの番号。最初のパラメータの番号は1です。
[Optional Parameters]	レコードの最後に、以下のオプションのパラメータを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>DEBUG</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、フックについての詳細情報が表示されます。出力ウィンドウ（またはdbgview）に、フックを設定しようとして発生したエラーに関する情報が表示されます。また、通知情報ペインに、フックが成功した関数やフックされた関数が呼び出された回数などの各フックに関する統計値が表示されます。</li> <li>• <b>NODISPLAY</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、要求された各フックの詳細情報が通知情報ペインの上部に表示されません。</li> <li>• <b>NOPOISON</b> NOPOISON を指定した場合は、メモリ ブロックが解放されても DevPartner エラー検出による無効データの上書きが行われません。  ユーザー作成のアロケータによって、解放済みのブロックにデータが保存される場合、または、アプリケーションによって、解放済みのブロック内のデータが引き続き使用される場合は、NOPOISON を指定してデータの破損を回避します。</li> <li>• <b>STATIC</b> DevPartner エラー検出によって、ユーザー作成のアロケータが静的にパッチされます。ユーザー作成のアロケータをアプリケーションにリンクして、インターフェイスをエクスポートした別の DLL の中で使用しない場合は、static オプションを指定します。</li> </ul>

DevPartner エラー検出では、解放関数からの戻り値はチェックされません。

## デアロケータ レコードのサンプル

以下は、仮定のデアロケータ レコードの例です。

### 例 1

この例では、freeXX という関数が **MyAlloc.dll** というライブラリにあります。この関数には、解放されるブロックへのポインタが最初のパラメータで渡される1つのパラメータがあります。DevPartner エラー検出では、アプリケーション プログラムに返す前にメモリに無効データをフィルしてはなりません。

```
Deallocator Module=MyAlloc.dll Function=freeXX
MemoryType=MEM_MALLOC NumParams=1 Address=1 NOPOISON
```

## 例2

この例は、foo.dll内のMyFreeという関数を示しています。この関数には、解放されるブロックへのポインタが最初のパラメータで渡される1つのパラメータがあります。DevPartnerエラー検出では、アプリケーションプログラムに返す前にメモリに無効データをフィルする必要があります。ブロックが解放されると、DevPartnerエラー検出では、ブロックがMEM\_CUSTOM1タイプのアロケータによって割り当てられたかどうかを検証されます。ブロックがこのグループからのものでない場合、エラーが生成されます。

```
Deallocator Module=foo.dll Funtion=MyFree
MemoryType=MEM_CUSTOM1 NumParams=1 Address=1
```

## 例3

この例では、MyFreeという関数が.LIBファイルとしてビルドされ、DataStore.dllというデータ収集コンポーネントに静的にリンクされます。MyFreeには3つのパラメータがあります。最初と最後のパラメータは、DevPartnerエラー検出には関係ありません。2番目のパラメータには、解放されるアドレスが含まれています。また、プライベート解放ルーチンでは、ブロックが解放されると、解放されたブロックにプライベート情報が保持されます。

```
Deallocator Module=DataStore.dll Function=MyFree
MemoryType=MEM_MALLOC NumParams=3 Address=2 NOPOISON
STATIC
```

メモ： 関数名がDLLからエクスポートされていない場合は、STATICを指定します。

## QuerySizeレコード

QuerySizeレコードを作成して、割り当てられたメモリのブロックのサイズを返す関数を記述します。以下の形式に従います。

```
QuerySize Module=module_name Function=func_name MemoryType=mem_type
NumParams=param_num Address=address_value [Optional Parameters]
```

メモ： ユーザー定義のアロケータのQuerySizeレコードを省略すると、DevPartnerエラー検出によって、その関数の誤ったブロックサイズが返されます。

表4-5. QuerySizeレコード

パラメータ	説明
QuerySize	レコードの最初のパラメータはQuerySizeという単語にして、サイズ ルーチンを記述していることを示す必要があります。
module_name	ユーザー作成のアロケータを含むモジュール（実行ファイルまたはDLL）の名前。 メモ：モジュール名では、ワイルドカードは使用できません。
func_name	ユーザー作成のアロケータ内の割り当てられたメモリのブロックのサイズを返す関数の名前。C++を使用している場合は、関数の「短縮」名にする必要があります。このパラメータでは、大文字と小文字が区別されます。

表4-5. QuerySize レコード

パラメータ	説明
mem_type	<p>このパラメータは、クエリされるメモリの種類を記述するメカニズムを提供します。現在のDevPartner エラー検出では、以下のメモリの種類が定義されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>MEM_MALLOC malloc、calloc、strdupなどのルーチンから返されるメモリのブロックを記述します。この種類のメモリは、Cランタイム ライブラリ解放ルーチンのようなルーチンを使用して解放されます。</li> <li>MEM_NEW new 演算子から返され、delete 演算子によって解放されるメモリのブロックを記述します。</li> <li>MEM_CUSTOM1～MEM_CUSTOM9 特定のデアロケータと組み合わせる必要のあるメモリのブロックを記述します。この種類を使えば、開発者は、上述した標準メモリ アロケータに影響を及ぼさない独自のカスタム メモリ アロケータを宣言することができます。</li> </ul> <p>DevPartner エラー検出では、特定のメモリの種類で割り当てられたメモリのブロックが同じ種類の関数で解放されるかどうかを検証されます。種類が一致しない場合、DevPartner エラー検出では、実行時にメモリ競合エラーが表示されます。</p>
param_num	<p>関数に渡されるパラメータの数。この値は1～32にする必要があります。</p> <p>ユーザー作成のアロケータ関数の記述に使用するパラメータの数を指定します。正しい数を指定しなかった場合は、予期せぬ結果が生じる可能性があります。</p>
address_value	<p>クエリされるブロックへのポインタを含むパラメータの番号。最初のパラメータの番号は1です。</p>

表4-5. QuerySize レコード

パラメータ	説明
[Optional Parameters]	レコードの最後に、以下のオプションのパラメータを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>DEBUG</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、フックについての詳細情報が表示されます。出力ウィンドウ（または <code>dbgview</code>）に、フックを設定しようとして発生したエラーに関する情報が表示されます。また、通知情報ペインに、フックが成功した関数やフックされた関数が呼び出された回数などの各フックに関する統計値が表示されます。</li> <li>• <b>NODISPLAY</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、要求された各フックの詳細情報が通知情報ペインの上部に表示されません。</li> <li>• <b>STATIC</b> DevPartner エラー検出によって、ユーザー作成のアロケータが静的にパッチされます。ユーザー作成のアロケータをアプリケーションにリンクして、インターフェイスをエクスポートした別の DLL の中で使用しない場合は、<code>static</code> オプションを指定します。</li> </ul>

この関数からの戻り値として、`size_t` でブロックのサイズが提供されるとみなされます。

## QuerySize レコードのサンプル

以下は、仮定の QuerySize レコードの例です。

### 例 1

この例では、`MySize` という関数が `foo.dll` というライブラリにあります。この関数には、ブロックへのポインタが最初のパラメータでクエリされる 1 つのパラメータがあります。

```
QuerySize Module=foo.dll Function=MySize
MemoryType=Mem_Custom1 NumParams=1
Address=1
```

### 例 2

この例では、`MySize` 関数が `DataStore.dll` というデータ収集コンポーネントに静的にリンクされます。`MySize` 関数には 2 つの関数があり、クエリされるアドレスは最初のパラメータで渡されます。

```
QuerySize Module=DataStore.dll Function=MySize
MemoryType=MEM_NEW NumParams=2
Address=1 STATIC
```

**メモ：** 関数名が DLL からエクスポートされていない場合は、`STATIC` を指定します。

## リアロケータ レコード

リアロケータ レコードを作成して、メモリを再割り当てする関数を記述します。以下の形式に従います。

```
Reallocator Module=module_name Function=func_name MemoryType=mem_type
NumParams=param_num Address=address_value Size=size_value
[Count=count_num] [BufferLoc=buffer_loc] [Optional Parameters]
```

**メモ：** デフォルトで、指定された関数の戻り値は、割り当てられたブロックのアドレスになります。BufferLocパラメータを指定すると、この動作を変更して、割り当てられたブロックのアドレスがパラメータに返されるように指定できます (UserAllocators.dat ファイル内の **MAPIAllocateBuffer** を参照してください)。

表4-6. リアロケータ レコード パラメータ

パラメータ	説明
Reallocator	レコードの最初のパラメータはReallocatorという単語にして、再割り当てルーチンを記述していることを示す必要があります。
module_name	ユーザー作成のアロケータを含むモジュール (実行ファイルまたはDLL) の名前。 <b>メモ：</b> モジュール名では、ワイルドカードは使用できません。
func_name	ユーザー作成のアロケータ内のメモリのブロックを再割り当てする関数の名前。C++を使用している場合は、関数の「短縮」名にする必要があります。 このパラメータでは、大文字と小文字が区別されます。
mem_type	このパラメータは、再割り当てされるメモリの種類を記述するメカニズムを提供します。現在のDevPartnerエラー検出では、以下のメモリの種類が定義されています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>MEM_MALLOC malloc、calloc、strdupなどのルーチンから返されるメモリのブロックを記述します。この種類のメモリは、Cランタイム ライブラリ解放ルーチンのようなルーチンを使用して解放されます。</li> <li>MEM_NEW new 演算子から返され、delete 演算子によって解放されるメモリのブロックを記述します。</li> <li>MEM_CUSTOM1～MEM_CUSTOM9 特定のデアロケータと組み合わせる必要のあるメモリのブロックを記述します。この種類を使えば、開発者は、上述した標準メモリ アロケータに影響を及ぼさない独自のカスタム メモリ アロケータを宣言することができます。</li> </ul> DevPartnerエラー検出では、特定のメモリの種類で割り当てられたメモリのブロックが同じ種類の関数で解放されるかどうかを検証されます。種類が一致しない場合、DevPartnerエラー検出では、実行時にメモリ競合エラーが表示されます。

表4-6. リアロケータ レコード パラメータ

パラメータ	説明
param_num	関数に渡されるパラメータの数。この値は1～32にする必要があります。 ユーザー作成のアロケータ関数の記述に使用するパラメータの数を指定します。正しい数を指定しなかった場合は、予期せぬ結果が生じる可能性があります。
address_value	再割り当てされるブロックへのポインタを含むパラメータの番号。最初のパラメータの番号は1です。
size_value	再割り当てするブロックのサイズを含むパラメータ番号。最初のパラメータの番号は1です。
count_num	このオプション パラメータは、sizeパラメータと countパラメータを受け取る calloc のような関数の記述に使用します。割り当てるサイズに必要なブロック数を指定します。このパラメータを省略した場合は、1とみなされます。
buffer_loc	再割り当てするブロックのアドレスを保持するアドレスを含むパラメータの番号。最初のパラメータの番号は1です。

表4-6. リアロケータ レコード パラメータ

パラメータ	説明
<b>[Optional Parameters]</b>	レコードの最後に、以下のオプションのパラメータを指定できます。
• <b>DEBUG</b>	このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、フックについての詳細情報が表示されます。出力ウィンドウ（または <code>dbgview</code> ）に、フックを設定しようとして発生したエラーに関する情報が表示されます。また、通知情報ペインに、フックが成功した関数やフックされた関数が呼び出された回数などの各フックに関する統計値が表示されます。
• <b>NODISPLAY</b>	このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、要求された各フックの詳細情報が通知情報ペインの上部に表示されません。
• <b>NOFILL</b>	このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、前の割り当ての最後に追加されたその他のバイトが DevPartner エラー検出の「fill」文字列でフィルされません。  <b>メモ</b> ： <code>calloc</code> のように、ユーザー作成のアロケータによってブロックがデータで初期化される場合には、 <b>NOFILL</b> を指定してデータが破損されないようにします。
• <b>NOGUARD</b>	このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、この割り当て関数によって作成されたブロックの最後に保護バイトが追加されません。
• <b>STATIC</b>	DevPartner エラー検出によって、ユーザー作成のアロケータが静的にパッチされます。ユーザー作成のアロケータをアプリケーションにリンクして、インターフェイスをエクスポートした別の DLL の中で使用しない場合は、 <code>static</code> オプションを指定します。

DevPartner エラー検出では、再割り当て関数からの戻り値がチェックされ、NULL 値はエラーを示すとみなされます。NULL 以外のアドレスは、新たに割り当てられたメモリのブロックであるとみなされます。

### リアロケータ レコードのサンプル

以下は、仮定のリアロケータ レコードの例です。

## 例1

`reallocXX` という関数が `foo.dll` というモジュールで宣言されます。この関数には2つのパラメータがあります。最初のパラメータは既存のメモリ ブロックのアドレス、2番目のパラメータは要求されたブロックのサイズです。オプションのパラメータが指定されていないため、DevPartner エラー検出では、アプリケーション プログラムにコントロールを返す前に、新しいメモリに（ブロックがより大きいことを前提として）充てんパターンがフィルされます。

```
Reallocator Module=foo.dll Function=reallocXX
MemoryType=MEM_MALLOC NumParams=2 Address=1 Size=2
```

## 例2

`reallocClear` という関数が `foo.dll` というモジュールで宣言されます。この関数には3つのパラメータがあります。最初のパラメータは既存のメモリ ブロックのアドレス、3番目のパラメータは要求されたブロックのサイズです。この再割り当てルーチンでは、新しいブロックで割り当てられた追加のメモリに対して独自のフィル処理が実行されます。このため、DevPartner エラー検出では、新しいブロックの追加のメモリをフィルできません。

**メモ：** DevPartner エラー検出では、パラメータ2の内容は無関係であるため無視されます。

```
Reallocator Module=foo.dll Function=reallocClear
MemoryType=MEM_MALLOC NumParams=3 Address=1 Size=3
NOFILL
```

## 例3

`MyRealloc` という関数が `.LIB` ファイルにビルドされ、`DataStore.dll` というデータ収集コンポーネントに静的にリンクされます。`MyRealloc` には、4つのパラメータがあります。最初と4番目のパラメータは、DevPartner エラー検出には関係ありません。2番目のパラメータには既存のブロックのアドレスが含まれており、3番目のパラメータにはブロックの新しいサイズが含まれています。データ収集ルーチンでは、新しいデータが再割り当てのブロックにあらかじめロードされます。

```
Reallocator Module=DataStore.dll Function=MyRealloc
MemoryType=MEM_ALLOC NumParams=4 Address=2 Size=3
NOFILL STATIC
```

**メモ：** 関数名がDLLからエクスポートされていない場合は、`STATIC`を指定します。

## Ignore レコード

Ignore レコードを作成して、DevPartner エラー検出メモリ追跡システムで無視する関数を記述します。以下の形式に従います。

```
Ignore Module=module_name Function=func_name [Optional Parameters]
```

Ignore レコードを使用して、DevPartner エラー検出でユーザー作成のアロケータを無視するか、ユーザー作成のアロケータで使用される下位アクセス ルーチンが無視するかを指定します。Ignore レコードでは、DevPartner エラー検出メモリ追跡システムで、通常は監視されるAPIが追跡されないように指定できます。

**メモ：** Ignore レコードを作成した場合、DevPartner エラー検出メモリ追跡システムでは、それらのAPIから割り当てられたメモリや解放されたメモリが監視されなくなります。その結果、DevPartner エラー検出では、このメモリが認識されなくなります。これにより、コール バリデーション モジュールと FinalCheck 分析モジュールで、不正なエラー メッセージや不完全なエラー メッセージが生成されることがあります。この関数の使用法についてご不明な点は、Customer Care にお問い合わせください。

表4-7. Ignore レコード パラメータ

パラメータ	説明
Ignore	レコードの最初のパラメータは Ignore という単語にして、API を無視ように記述していることを示す必要があります。
module_name	無視する関数を含むモジュール（実行ファイルまたは DLL）の名前 <b>メモ：</b> モジュール名では、ワイルドカードは使用できません。
func_name	メモリ追跡システムで無視する関数の名前。C++ を使用している場合は、関数の「短縮」名にする必要があります。このパラメータでは、大文字と小文字が区別されます。
[Optional Parameters]	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>DEBUG</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、フックについての詳細情報が表示されます。出力ウィンドウ（または <code>dbgview</code>）に、フックを設定しようとして発生したエラーに関する情報が表示されます。また、通知情報ペインに、フックが成功した関数やフックされた関数が呼び出された回数などの各フックに関する統計値が表示されます。</li> <li>• <b>NODISPLAY</b> このパラメータを指定した場合、DevPartner エラー検出では、要求された各フックの詳細情報が通知情報ペインの上部に表示されません。</li> <li>• <b>STATIC</b> DevPartner エラー検出によって、ユーザー作成のアロケータが静的にパッチされます。ユーザー作成のアロケータをアプリケーションにリンクして、インターフェイスをエクスポートした別の DLL の中で使用しない場合は、<code>static</code> オプションを指定します。</li> </ul>

## Ignore レコードのサンプル

以下は、仮定の Ignore レコードの例です。

### 例 1

この例では、Ignore レコードが作成され、DevPartner エラー検出では、GlobalAlloc によって割り当てられたメモリは監視されますが、GlobalFree を使用してオペレーティング システムに返されたメモリを解放する要求は無視されます。

**メモ：** これにより、DevPartner エラー検出によって多数の誤ったメモリ リークがレポートされます。

```
Ignore Module=Kernel32.dll Function=GlobalFree
```

## 例2

この例では、コールのGlobalAlloc ファミリによって操作されたメモリがDevPartner エラー検出で無視されます。

**メモ：** これにより、DevPartner エラー検出によって多数の誤ったコールバリデーションエラーとFinalCheckエラーがレポートされます。

```
Ignore Module=Kernel32.dll Function=GlobalAlloc
```

```
Ignore Module=Kernel32.dll Function=GlobalReAlloc
```

```
Ignore Module=Kernel32.dll Function=GlobalFree
```

**メモ：** これらの3行をUserAllocators.dat に追加することはお勧めできません。

## 例3

この例では、指定したモジュール内の静的にリンクされた関数によって操作されたメモリがDevPartner エラー検出で無視されます。独自の代替メモリ割り当てライブラリを作成して標準のCランタイムライブラリと同じ名前を使用し、DevPartner エラー検出でライブラリの使用を監視しない場合は、以下のようなリンクを追加する必要があります。

```
Ignore Module=MyDLL.dll Function=Malloc STATIC
```

```
Ignore Module=MyDLL.dll Function=free STATIC
```

```
Ignore Module=MyDLL.dll Function=realloc STATIC
```

**メモ：** このようなリンクをUserAllocators.dat ファイルに追加する前に、Micro Focus Customer Careにご連絡ください。

## UserAllocator フック要求をコーディングする

UserAllocator フック要求を作成する場合に、考慮する必要がある注意事項を以下に示します。

- ◆ MEM\_CUSTOM1 ~ MEM\_CUSTOM9 を使って、個別のメモリ割り当てをシステムの割り当てから分離します。
- ◆ アロケータのタイプごとに一意のカスタム アロケータのタイプを指定します。
- ◆ 必ず、アロケータに対応するタイプを使ってメモリを解放します。たとえば、アロケータが MEM\_CUSTOM1 タイプでフックされた場合は、同様に MEM\_CUSTOM1 タイプでフックされたデアロケータを使ってメモリを解放する必要があります。デアロケータが一致しない場合は、割り当て競合エラーが報告されます。

## UserAllocators に関するコード要件

UserAllocatorのメモリ割り当てフックを利用するには、アプリケーションコードに、メモリの割り当てと解放を制御する関数を含める必要があります。

### アロケータ関数フック

- ◆ 呼び出すアロケータ関数には、必要なメモリのバイト数を示すパラメータを含める必要があります。
- ◆ この関数は、割り当てられたメモリの場所を返すか、その場所を指しているアドレスをパラメータで返す必要があります。
- ◆ その他のパラメータを関数に含めることもできます。

### 例

```
void *GetMemory(int BytesRequested);
```

Allocator

```
Module=bcheap.dll  
Function=GetMemory  
MemoryType=MEM_CUSTOM1  
NumParams=1  
Size=1  
Static  
Noguard  
NoFill  
Debug
```

または

```
void *pVoid;
```

```
HRESULT GetMemoryAgain(int BytesRequested, &pVoid);
```

// 上の例では、メモリアロケータによって、割り当てられたメモリの場所がpVoidポインタに格納されます。

Allocator

```
Module=bcheap.dll  
Function=GetMemoryAgain  
MemoryType=MEM_CUSTOM1  
NumParams=2
```

```

Size=1
BufferLoc=2
Static
Noguard
NoFill
Debug

```

### デアロケータ関数フック

- ◆ 呼び出すデアロケータ関数には、解放するメモリのアドレスを示すパラメータを含める必要があります。
- ◆ その他のパラメータを関数に含めることもできます。

#### 例

```

; static void *mark_free(void *p, int nLen, void *pExclude, int nExcludeLen)
Deallocator
    Module=bcheap.dll
    Function=mark_free
    MemoryType=MEM_CUSTOM1
    NumParams=4
    Address=1
    Static
    NoPoison
    Debug

```

### リアロケータ関数フック

- ◆ 呼び出すリアロケータ関数には、必要なメモリのバイト数を示すパラメータを含める必要があります。
- ◆ リアロケータ関数には、再割り当てする「古い」メモリのアドレスを示すパラメータを含める必要があります。
- ◆ リアロケータ関数は、割り当てられた「新しい」メモリの場所を返すか、その場所を指しているアドレスをパラメータで返す必要があります。
- ◆ その他のパラメータを関数に含めることもできます。

#### 例

```

; void *DoMyRealloc(MyHeap *me, void *p, uint32 uSize)
ReAllocator

```

```
Module=bcheap.dll  
Function=DoMyRealloc  
MemoryType=MEM_CUSTOM1  
NumParams=3  
Address=2  
Size=3  
NoFill  
NoGuard  
Static  
Debug
```

## UserAllocator フックをデバッグする

エラー検出では、UserAllocator フックに関する情報の表示方法を変更して、そのデバッグを容易にするために使用可能な2つのキーワードが提供されます。

### NoDisplay

デフォルトで、エラー検出の通知情報ペインの上部に、ファイル要求から解釈されたフックの詳細が表示されます。以下に例を示します。

```
Allocator Module=bcheap.dll Function=MarkNodeAllocated  
MemoryType=MEM_CUSTOM1 NumParams=3 Size=1 BufferLoc=3 NoFill NoGuard Static Debug
```

フック情報の詳細を通知情報ペインの上部に表示したくない場合は、NoDisplay キーワードをフック要求に追加します。

### Debug

エラー検出では、フック要求に追加することによって拡張詳細が表示される Debug キーワードも提供されます。

### 通知情報ペイン

フック要求内に Debug キーワードがあれば、エラー検出の実行が完了してから、通知情報ペインの下部に拡張詳細が表示されます。通知情報ペインの下部に表示される詳細には、フックが成功した関数やフックされた関数が呼び出された回数などの各フックに関する統計値が含まれます。

### エラーの詳細

通知情報ペインの下部に、関数がフックされなかったというメッセージが表示された場合は、その失敗したフックのデバッグを支援する詳細がエラー検出に表示されます。

Visual Studio で作業している場合は、出力ウィンドウにエラーの詳細が表示されます。

スタンドアロンバージョンのエラー検出を実行している場合は、**DbgView** ツールにエラーの詳細が表示されます。

## UserAllocators.dat でエラーを診断する方法

**UserAllocators.dat** にレコードを追加すると、1つまたは複数の以下のようなエラーが表示されることがあります。

### ◆ ファイル アクセス エラー

**UserAllocators.dat** は、DevPartner エラー検出インストール フォルダの **Data** フォルダに格納されたテキスト ファイルです。このファイルが削除されたり、読み取り不可にされたりすると、DevPartner エラー検出によってエラーがレポートされます。

### ◆ ファイル書き込み エラー

DevPartner エラー検出セッションが開始されると、**UserAllocators.nlb** という名前のファイルが作成されます。**[オプション]>[データ]>[NLB ファイル ディレクトリ]** で指定した場所が無効、または読み取り専用である場合、エラーが発生します。このエラーを解決するには、**[オプション]** でフォルダの指定を変更するか、フォルダのプロパティを変更して、書き込み可能にします。

### ◆ 解析エラー

DevPartner エラー検出で **UserAllocators.dat** ファイルの解析中にエラーが発生した場合、**[エラー]** タブにエラーが記録されます。**UserAllocators.dat** エラーの発生時に **[メモリの追跡]** または **[リソースの追跡]** が有効な場合、これらの機能は無効になります。

## トークン解析エラー

DevPartner エラー検出では、以下のルールを使用して、ファイルが一度に 1 行ずつ解析されます。

- ◆ 空白行、およびセミコロン (;) やダブルスラッシュ (//) で始まる行は無視されます。
- ◆ 追加される各 UserAllocator 定義は有効なレコード タイプで始まる必要があります。
- ◆ 各定義のすべてのパラメータは、1つまたは複数のスペースかタブで区切り、各レコードタイプのルールに従う必要があります。

## 意味的エラー

各レコード タイプは、各パラメータのルールに従って解析されます。パラメータでは、大文字と小文字が区別されることがあり、場合によっては、有効範囲内にある必要があります（たとえば、関数で使用できるパラメータの最大数は 32 です）。

同じファイル内に重複したエントリがある場合にも、レコードが相互に競合する場合、エラーが生成されることがあります。**UserAllocators.dat** は高度な機能とみなされるため、広範な照合は行われません。

## UserAllocators.datの変更後にアプリケーションが不安定になる場合

**UserAllocators.dat** にレコードを追加すると、DevPartner エラー検出では、ユーザー作成のアロケータ間のコールが監視されます。DevPartner エラー検出に対して API を正しく記述しなかった場合、アプリケーションがクラッシュしたり、予期しない動作をすることがあります。このような問題の最も一般的な原因の1つは、関数のパラメータの数を誤って指定することです。

一定のままのメモリの内容に依存し、記述に **NOFILL** オプションまたは **NOPOSITION** オプションを追加しなかった場合にも、問題が発生することがあります。

エラーが発生し、対処法がわからない場合は、Micro Focus Customer Care にお問い合わせください。お問い合わせの際には、Customer Care に以下の情報をお知らせください。

- ◆ 実行している DevPartner のバージョン
- ◆ **UserAllocators.dat** ファイルのコピー
- ◆ 発生している問題の詳細

場合によっては、ユーザー アロケータ関数を含む DLL のコピーと DLL へのリンクに使用されるマップファイルをご提供いただくこともあります。

可能な場合は、Ignore レコードは使用しないでください。Ignore レコードによって、アプリケーションの分析時に DevPartner エラー検出が予期しない応答をすることがあります。

## 第5章

# デッドロック分析

デッドロック分析は、カスタマのアプリケーションで、デッドロック、潜在的なデッドロック、およびその他の同期エラーを検索する自動化された方法です。

この章では、以下の内容について説明します。

- ◆ デッドロック分析で使用される用語の概要
- ◆ デッドロックと潜在的なデッドロックの例
- ◆ 同期トピックの詳細情報のソース

## バックグラウンド：シングル スレッド アプリケーションとマルチスレッド アプリケーション

古いスタイルのC/C++プログラムには、多数の関数を呼び出し、さまざまな処理を実行したあと終了する単純なメインルーチンがありました。これらのプログラムでは、シングル スレッドの実行が使用されました。つまり、プログラムでは一度に1つのインストラクションが実行されました。デバッガを使用してプログラムの手順を実行するとしたら、それぞれの処理が実行されていくのを映画の映像のように見ることができました。

### スレッド

新しいアプリケーションは、マルチスレッドにできます。スレッドとは、コントロールのフローのことです。マルチスレッドのアプリケーションには、2つ以上のコントロールのフローがあります。Windows `CreateThread` 関数を使用すると、追加のスレッドを作成できます。`CreateThread` には、新たに作成したスレッドで実行される必要がある関数のアドレスを含む多数のパラメータがあります。`CreateThread` 関数が正常に実行されると、アプリケーションには追加の実行のスレッドが作成されます。

スレッドを暗黙的に作成するには、多数の方法があります。この例には、サードパーティ製ライブラリ、COMまたはDCOM、あるいは共通言語ランタイムを使用して、`_beginthread` を呼び出す方法があります。

プログラムで複数のスレッドを実行する場合、2つのスレッドで同じリソースに同時にアクセスを試みることができます。このリソースには、変数、ファイル、ハンドル、Windows リソースなどが含まれます。複数のスレッドが同じリソースに同時にアクセスしようとする、同期化の問題が発生することがあります。たとえば、T1とT2という2つのスレッドで、どちらも1～100の数字を印刷しようとする、各スレッドからの出力は以下のようになります。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 ... 95 96 97 98 99 100

両方のスレッドを同時に実行した場合、出力は以下の例のように不規則なものになります。スレッドT1からの出力は標準体、スレッドT2からの出力は太字の斜体です。

1 2 3 4 1 2 5 6 3 4 5 6 7 8 7 ... 95 96 97 94 95 96 97 98 99 98 99 100 100

## クリティカル セクション

このような問題を防ぐには、スレッド間の相互作用を調整する必要があります。最新のオペレーティングシステムには一連の同期関数があり、これらの関数を呼び出して共有リソースへのアクセスを調整できます。最も使いやすく一般的な同期オブジェクトは、**クリティカルセクション**と呼ばれます。クリティカルセクションは、一度に1つのスレッドだけがリソースにアクセスできるようにする単純な関数です。

上記のように、1～100の数を印刷するように作成されたスレッドT1とT2の例について考えてみます。クリティカルセクションC1を定義すると、両方のスレッドを実行する場合に不規則な出力を防ぐことができます。このクリティカルセクションでは、出力ストリームへのアクセスが制御されます。スレッドT1とT2によって実行される機能は、以下のように変更する必要があります。

- 1 いずれかのスレッドでクリティカルセクションC1を作成します。
- 2 次に、各スレッドで以下の手順を実行します。
  - a クリティカルセクションC1を要求します。
  - b 1～100の数のリストを印刷します。
  - c クリティカルセクションC1を解放します。
- 3 このあとスレッドは解放され、他のスレッドに影響を及ぼさない、要求されたその他の処理を実行します。

**手順 2-a**は、クリティカルセクションC1へのスレッドの排他的アクセスを許可するようオペレーティングシステムに要求するEnterCriticalSectionコールに変換されます。クリティカルセクションが使用できない場合、オペレーティングシステムではスレッドを一時停止し、C1が使用可能になるまで待機します。

1つのスレッドがクリティカルセクションにアクセスすると、C1のクリティカルセクションルールに従うその他のスレッドでは、出力を印刷できません。スレッドで1～100の数が印刷されたあと、**手順 2-c**で、オペレーティングシステムにLeaveCriticalSectionが通知されます。これにより、他のスレッドのクリティカルセクションが解放されます。

プログラムのすべてのスレッドで、クリティカルセクションを使用して端末への出力を印刷する必要があると定めたルールはありません。ただし、このルールに従った場合、出力は常に正確に表示されます。

この同じルールは、変数、構造、ファイル、その他の共有リソースに適用できます。

**メモ：** 2つの出力ストリームが相互に衝突するコードを作成しないかぎり、ほとんどの場合、クリティカルセクションのコンソール出力をラップする必要はありません。

## デッドロッカー基本定義

前述の例に基づき、クリティカルセクションは、共有リソースへのアクセスを許可する非常に単純なメカニズムであるといえます。ただし、クリティカルセクションは、問題の原因となることがあります。

C1、C2、およびC3という名前の複数のクリティカルセクションを作成するプログラムを考えてみます。これらの各クリティカルセクションは、スレッド間で共有される個別のリソースへのアクセスを保護するために使用されます。

スレッドが1つのクリティカル セクション（たとえば、C1）へのアクセスを許可され、次に別のクリティカル セクション（たとえば、C2）へアクセスしようとした場合、C2がすでに別のスレッドに割り当てられていることもあり得ます。別のスレッドがすぐにC2を解放すれば、問題はありません。最初のスレッドはC2が使用可能になるまで待機したあと、C2へのアクセスを許可し、処理が続行されます。

一方、C2を保有するスレッドが、別の同期オブジェクトが使用可能になるのを待機する必要がある場合（C1など）、両方のスレッドが必要なリソースへのアクセスを待機して停止します。2つ以上のスレッドが、使用可能になることのないリソースを待機して停止した場合、その結果はデッドロックと呼ばれます。

## デッドロックを回避する方法

デッドロックは、複数のスレッドが共有リソースを使用しようとしたが、そのリソースにアクセスできない場合に発生します。デッドロックを回避するには数多くの方法があります。

- ◆ 同期オブジェクトが必要な場合にのみ、それらのオブジェクトへのアクセスを要求します。オブジェクトにアクセスしたら、できるだけ早く使用し、他のスレッドが使用できるように、そのオブジェクトを解放します。
- ◆ 同時に複数の同期オブジェクトにアクセスして特定の処理を実行する必要がある場合は、最初のオブジェクトを要求し、次に2番目のオブジェクトへのアクセスを試みます。2番目のオブジェクトが使用できない場合、両方のオブジェクトを解放し、少しの間待機します。待機が終了したら、再度リソースへのアクセスを試みます。別のリソースの待機中にスレッドがブロックされた場合、リソースの所有権を解放することが非常に重要です。オブジェクトを解放しないと、「致命的な囲い込み」を引き起こし、デッドロック状況をさらに悪化させるだけの場合があります。
- ◆ 常に同じ順序でリソースを要求します。たとえば、C1、C2、およびC3にアクセスして処理を実行する必要がある場合、常に同じ順序（C1、C2、C3）でアクセスし、逆の順序（C3、C2、C1）で解放します。
- ◆ 処理を実行する必要がある同期オブジェクトをすべて取得したら、別のリソースの待機をブロックする可能性がある処理を実行しません。

同期オブジェクトを処理する方法は、その他にも数多くあります。「[追加情報](#)」（80ページ）に、同期オブジェクトについて説明しているMSDNリソースと書籍を示します。

## 潜在的なデッドロック

DevPartner エラー検出では、ユーザーが安全でない方法でリソースにアクセスしていることが検出されると、潜在的なデッドロックがレポートされます。この例として、T1、T2、T3の3つのスレッドがあり、これらのすべてのスレッドでクリティカル セクションC1、C2、C3によって制御される一連のリソースを利用するアプリケーションの例があります。

表5-1に、各スレッドで特定の処理を実行するために必要なクリティカル セクションを示します。

表5-1. 潜在的なデッドロックの例：スレッドとそれらのスレッドに必要なクリティカル セクション

スレッド	クリティカル セクション
T1	C1、C2

表5-1. 潜在的なデッドロックの例：スレッドとそれらのスレッドに必要なクリティカル セクション

スレッド	クリティカル セクション
T2	C2、C3
T3	C3、C1

各スレッドは、単独で動作し、必要なクリティカル セクションを取得して、指定されたタスクを実行できます。ただし、3つのスレッドがすべて同時にこれらの処理を実行しようとすると、問題が発生することがあります。

## Dining Philosophers（食事をする哲学者）

Dining Philosophers は、コンピュータサイエンス クラスで潜在的なデッドロックを説明する場合によく使用される典型的な例です。DevPartner エラー検出ソフトウェアには、Dining Philosophers のサンプル コードが含まれています。このサンプル コードは以下の場所にあります。

...¥DevPartner Studio¥Examples¥DeadlockPhilosophers

Dining Philosophers の問題は、複数の哲学者が丸テーブルにつき、そのテーブルの中央に食べ物を盛った大きな皿が置かれている状態から始まります。各哲学者の間には、箸が1本ずつ置かれています。

テーブルの周りに着席した哲学者は以下の3種類のことができます。

- 1 **休む**：休んでいる哲学者は座ったままで何もしません。任意の期間休みます。
- 2 **話す**：話をする哲学者は、興味を持って聞いてくれるテーブルの他のだれかに話しかけます。任意の期間話します。
- 3 **食べる**：空腹な哲学者は食べようとします。そのために、箸を取り上げようとします。最も単純な場合には、哲学者は常に左の箸を先に取り上げようとします。うまくいったら、次に右の箸を取り上げようとします。左と右の両方の箸を手にした哲学者は任意の期間食事します。それから箸を置き、休むか話し始めます。

最初の箸を取り上げられなかった哲学者は、数秒待ち、再度箸を取り上げようとします。うまくいった哲学者は、次に右の箸を取り上げようとします。右の箸が使用できない場合、哲学者は数秒待ち、再度右の箸を取り上げようとします。

すべての哲学者が同時に左の箸を取り上げた場合、問題が発生します。その場合、だれも左の箸を置かないため、全員が飢え死にしまいます（デッドロック）。

Dining Philosopher アルゴリズムの構成により、ただちにデッドロックすることもあれば、数分間の実行後にデッドロックすることもあります。テーブルに哲学者と箸を追加すれば、実際のデッドロック数は減少する傾向があります。ただし、すべての哲学者が同時に空腹になる可能性はその場合にも存在します。これは、潜在的なデッドロックと呼ばれます。

潜在的なデッドロックは実稼動システムで発生することが多いため、多くの場合、追跡が最も困難なデッドロックです。これらの問題を開発システムで複製する試みは、通常、長時間を要し、多くの場合問題の核心が見つかりません。

潜在的なデッドロックが検出された場合、DevPartner エラー検出によって、実際のデッドロックが発生するずっと前に通知されます。DevPartner エラー検出では、実際のデッドロックが発生する方法を説明した詳細な情報が表示されます。これにより、より容易にコードを変更して問題の発生を防ぐことができます。

## 同期オブジェクトの監視

デッドロック分析では、アプリケーションのすべての同期オブジェクトにおいても、エラーと以下のような問題のある用法が監視されます。

- ◆ ユーザーが指定した期間を超える待機
- ◆ すでに所有されているクリティカル セクションに再入するスレッド
- ◆ すでにスレッドによって所有されている Mutex の待機
- ◆ 同期オブジェクトを解放せずにスレッドが終了する

また、DevPartner エラー検出を設定して、名前を付けることができる同期オブジェクトが命名規則に従っているかどうかを検証できます。たとえば、プロセスの外部からアクセスできないように、同期オブジェクトを名前なしにする必要があるかどうかを判断できます。すべての名前付きオブジェクトは、潜在的なエラーとしてのフラグが付けられます。このリストを使用して、システムの他のプロセスによる不要なアクセスを防ぐために必要なセキュリティ記述子が、名前付きの同期オブジェクトに含まれているかどうかを確認できます。

すべての同期エラーのリストは、オンライン ヘルプで、**検出されたエラーセクションのデッドロック エラー**に表示されます。

## その他の同期オブジェクト

Windows オペレーティング システムには、[76 ページ](#)で説明したクリティカル セクションの他にもさまざまな種類の同期オブジェクトがあります。同期オブジェクトのリストと、MSDN からの定義の抜粋を以下に示します。抜粋のテキストは斜体で示されています。それぞれの用語について、詳細な定義および関連するコードの例を示します。

### クリティカル セクション

クリティカル セクション オブジェクト使用できるのがシングル プロセスのスレッドのみである点を除いて、クリティカル セクション オブジェクトでは、Mutex オブジェクトによって提供される同期と類似の同期が提供されます。

詳細な定義は、以下の URL を参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/Critical\\_Section\\_Objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/Critical_Section_Objects.asp)

コードの例は、以下の URL を参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using\\_critical\\_section\\_objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using_critical_section_objects.asp)

### イベント

イベント オブジェクトは、SetEvent 関数を使用することで、状態が通知されるように明示的に設定できる同期オブジェクトです。イベント オブジェクトは、特定のイベントが発生したことを示すシグナルをスレッドに送信する場合に役立ちます。

詳細な定義は、以下の URL を参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/event\\_objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/event_objects.asp)

コードの例は、以下のURLを参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using\\_event\\_objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using_event_objects.asp)

## Mutex

Mutex オブジェクトは、いずれかのスレッドによって所有されている場合は状態が通知され、所有されていない場合は状態が通知されないように設定される同期オブジェクトです。一度に1つのスレッドのみがMutex オブジェクトを所有できます。

Mutex オブジェクトは、クリティカル セクションよりも大幅に速度が遅くなります。

詳細な定義は、以下のURLを参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/mutex\\_objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/mutex_objects.asp)

Mutex オブジェクトの使用例は、以下のURLを参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using\\_mutex\\_objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using_mutex_objects.asp)

## セマフォ

セマフォ オブジェクトとは、ゼロと指定した最大値間の数を保持する同期オブジェクトのことです。この数は、スレッドがセマフォ オブジェクトの待機を終了するたびに減少し、スレッドがセマフォを解放するたびに増加します。

詳細な定義は、以下のURLを参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/semaphore\\_objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/semaphore_objects.asp)

コードの例は、以下のURLを参照してください。

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using\\_semaphore\\_objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using_semaphore_objects.asp)

## 追加情報

### MSDN リファレンス

同期オブジェクトの詳細については、MSDNで以下のリンクを参照してください。

同期の概要：

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/about\\_synchronization.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/about_synchronization.asp)

同期オブジェクト：

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/synchronization\\_objects.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/synchronization_objects.asp)

待機関数：

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/wait\\_functions.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/wait_functions.asp)

同期オブジェクトの使用法：

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using\\_synchronization.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/using_synchronization.asp)

同期参照：

[http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/synchronization\\_reference.asp](http://msdn.microsoft.com/library/default.asp?url=/library/en-us/dllproc/base/synchronization_reference.asp)

## その他の参照

以下の書籍には、同期オブジェクトの詳細が記載されています。

『Win32 Multithreaded Programming』 Aaron Cohen、Mike Woodring 著

『Debugging Applications for Microsoft .NET and Microsoft Windows』 John Robbins 著

『Debugging Windows Applications, 1st Edition』 John Robbins 著

『Operating Systems, 4th Edition』 William Stallings 著

『Foundations of Multithread, Parallel and Distributed Programming』 Gregory R. Andrews 著



## 付録 A

# エラー検出のトラブルシューティング

## トラブルシューティング

以下の問題が発生した場合は、対応する対処法を実行してみてください。それでもわからない場合は、Micro Focus Customer Careにお問い合わせください。

問題	対処法
エラー検出がメモリ上でステップングする	<ul style="list-style-type: none"><li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[メモリの追跡]で、[解放時に無効データをフィルする]を無効にします。</li><li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[メモリの追跡]で、[確保時にフィルする]を無効にします。</li></ul>
[デバッグ]ボタンで[検出されたプログラム エラー]ダイアログ ボックスを閉じると、デバッガでエラー検出が停止できなくなる	• [デバッグ]ボタンを使用して[検出されたプログラム エラー]ダイアログ ボックスを閉じると、アプリケーションでは、エラー検出によってエラー後の最初の行の初めに一時ブレークポイントが設定されます。一時ブレークポイントは、アプリケーションがデバッガで停止したときに削除されます。ブレークポイント例外をキャッチして実行を継続する例外ハンドラがアプリケーションにある場合、デバッガでブレークポイントをキャッチし、アプリケーションを停止することができなくなります。
「メモリ割り当ての競合：関数の不一致」エラーが表示され、ブロックがFree関数によって解放されたことが報告される	• newとdeleteを使用していると、エラー検出から、ブロックがfreeによって解放されたことを通知されます。この場合、Cランタイム ライブラリDLL (/MD) のリリース バージョンを使用している可能性があります。この問題を修正するには、Cランタイム ライブラリDLL (/MDd) のデバッグ バージョンに対してビルドします。これは、[C++ コード生成]プロパティ ページの[ランタイム ライブラリ]エントリで制御します。
エラー検出で、演算子newとfreeの間での割り当ての不一致がレポートされる	• <b>userallocators.dat</b> に、ユーザーが作成したすべてのアロケータを追加していることを確認します。 ...¥Data¥UserAllocators.dat ファイルのコメントを参照してください。

---

問題	対処法
エラー検出でメモリ割り当てとリソース割り当てが無視される	<ul style="list-style-type: none"><li>• マネージ デバッガを使ってマネージC++アプリケーション上でエラー検出を実行している場合は、アプリケーションではなく、<b>mscorwks.dll</b> または <b>mscorsrv.dll</b> から取得されたメモリ割り当てとリソース割り当てが表示されるため、エラー検出では無視されます。混合コードまたはマネージコードアプリケーション上でエラー検出を使用する場合は、以下の手順に従います。</li></ul> <ol style="list-style-type: none"><li>1 プロセスのデバッグに使用するバージョンの Visual Studio を開きます。</li><li>2 DevPartner エラー検出スタンドアロン アプリケーションを起動します。</li><li>3 エラー検出内でターゲット プロセスを開いて、<b>[プログラム]&gt;[実行]</b> を選択し、そのプロセスを実行します。</li><li>4 <b>[ツール]&gt;[プロセスにアタッチ]</b> をクリックして、ターゲット プロセスにデバッガをアタッチします。</li></ol> <p><b>メモ：</b><b>[マネージコード デバッグ]</b> (<b>[混合]</b> や <b>[自動]</b> ではありません) を指定して、デバッガでマネージコードのブレークポイントが正確にヒットするようにします。</p> <p>この手順を使えば、マネージコード内のブレークポイントを設定してヒットさせることができます。また、エラー検出で、メモリ割り当てとリソース割り当てが検出されます。</p>

---

問題	対処法
エラー検出下でアプリケーションを実行すると、「 <b>不正な文字列</b> 」エラーが表示される	<p>• ASCII 文字列をワイド文字列にキャストして API パラメータとして使用すると、実際の問題と無関係なエラーが報告される可能性があります。キャストには「データ型は信頼できます」という意味があり、エラー検出ではキャストが検出されません。以下に例を示します。</p> <pre>BSTR m_DSName; m_DSName=SysAllocString(BSTR(""));</pre> <p>コンパイラでは以下のように解釈されます。</p> <pre>m_DSName=SysAllocString((wchar_t *)"");</pre> <p>エラー検出によって以下のようにレポートされます。</p> <p>不正な文字列: SysAllocString へのコールのアドレス 0x0FE2751F で、ブロック 0x0FDF0000 (290816) が NULL で終了されていません。</p> <p>SysAllocString ステートメントでは、空の ASCII 文字列がワイド文字列にキャストされ、SysAllocString への入力パラメータとして使用されます。また、最初の 2 バイト NULL を検索することによって、wchar_t 文字列の最後が判断されます。さらに、この 2 バイト NULL の位置から割り出された長さを使って、新しい BSTR のサイズが特定されます。これによって、1 バイト ASCII 文字列の先頭とその後ろで偶然見つかった最初の 2 バイト NULL の間に存在するゴミのコピーが保存された m_DSName の新しい BSTR が正常に作成されます。</p> <p>上の例では、エラー検出によって、入力文字列の wchar_t (実際には 1 バイトの空の ASCII 文字列) が検査され、不正な文字列 (NULL 終了していない) が報告されます。このケースで使用したテストコードでは、DevPartner エラー検出では、1 バイト ASCII 文字列の先頭と偶然見つかった 2 バイト NULL の間に有効なメモリブロックが存在することが認識されます。そのメモリが他の目的のために割り当てられていない場合にだけ、入力文字列のスキャンが行われます。そのため、このケースでは、数バイトがスキャンされただけで、そのメモリ領域に 2 バイト NULL が存在しないことが報告されます。この問題を避けるには、ワイド文字列を入力として使用しているコードを変更します。</p>

問題	対処法
エラー検出でエラーが何も報告されない	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[全般]で、[イベントをログに記録]を有効にします。</li> <li>• DCOMまたはCOMベースのアプリケーションやコンポーネントがaspnet アカウントの制限下で実行される状況は2つあります。デフォルトでは、ASP.NETが有効なWeb ページから DCOMまたはCOMのアプリケーションやコンポーネントが起動されると、aspnet アカウントのコンテキストで実行されます。セキュリティ上の理由から、aspnet アカウントは制限付きアカウントになっています (これはユーザー グループのメンバで、同等の権限が設定されています)。このため、この状況では、COM コンポーネントにはエラー検出が正しく機能するために必要なセキュリティ権限がありません。この問題を回避するには、対話ユーザーのコンテキスト内で (dcomcnfg.exe を介して) 実行されるように DCOM または COM アプリケーションやコンポーネントを設定する必要があります。以下の手順で、対話ユーザーのコンテキストで実行されるように DCOM または COM のアプリケーションやコンポーネントを設定します。</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 コマンド プロンプトを開き、dcomcnfg.exe を実行します。</li> <li>2 [コンポーネント サービス]&gt;[コンピュータ]&gt;[マイ コンピュータ]&gt;[DComの構成]の順に選択します。</li> <li>3 COM コンポーネントを右クリックして、[プロパティ]を選択します。</li> <li>4 [識別]タブを選択します。</li> <li>5 [対話ユーザー]を選択していることを確認します。</li> <li>6 [OK]をクリックします。</li> </ol>
エラー検出の実行が極めて遅い	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出のすべてのオプションを有効にしていないか、確認します。オプションの中には、プロセッサやメモリを大量に消費するものがあります。本当に必要なオプションだけを使用してください。</li> <li>• 割り当ての最大コール スタック数を制限します ([オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[データ収集]を使用)。コール スタック数が大きいと、メモリを大量に消費します。</li> <li>• モジュールやファイルを除外して、分析を制限します ([オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[モジュールとファイル]を使用)。</li> <li>• FinalCheck は、開発の重要なマイルストーンでのみ使用します。</li> <li>• [.NET コール レポート]を無効にするか、[すべてのタイプ] ツリー ビューで選択するアセンブリの数を制限します。</li> <li>• アプリケーション内のリークだけを検出したい場合は、リーク分析のみの有効化を検討します。[メモリの追跡]の[リーク分析のみを有効にする]チェック ボックスをオンにすると、リークの監視を除いて、メモリ追跡内のすべての機能が無効になります。メモリ追跡による、オーバーラン、未初期化メモリの使用、またはダグリング ポインタの監視が実施されなくなります。システム モジュールによって割り当てられたメモリの評価が行われなため、コール バリデーションのメモリ ブロック チェックも無効になります。</li> </ul>

問題	対処法
ログが大き過ぎる	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[全般]で、[イベントをログに記録]を無効にします。</li> <li>• データ表示の深さを制限します ([オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[データ収集]を使用)。</li> <li>• モジュールやファイルを除外して、分析を制限します ([オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[モジュールとファイル]を使用)。</li> <li>• フィルタと抑制を使用して、レポート範囲を制限します。</li> <li>• [NETコール レポート]を無効にするか、[すべてのタイプ] ツリー ビューで選択するアセンブリの数を制限します。</li> <li>• [APIコール レポート]の[APIコールとリターンを収集する]を無効にします。</li> <li>• [リソースの追跡]を無効にするか、追跡するリソースを制限します。</li> </ul>
エラー検出でUserAllocators.log ファイルの作成に失敗したという内容のエラーが表示される	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 書き込み権がないフォルダでエラー検出を使用してアプリケーションを実行しようとする、以下のようなエラーが表示される場合があります。</li> </ul> <pre data-bbox="719 877 1401 972">UserAllocatorsError:An error was discovered when processing the UserAllocators.dat file.Failed to create UserAllocators.log file Error:0x00000005</pre> <p data-bbox="719 1003 1401 1098">[データ収集]設定ページで[NLB ファイル ディレクトリ]を設定して、UserAllocators.log ファイルを書き込むフォルダを制御できます。</p>
Windows Vista 上でエラー検出を使ってターゲットアプリケーションを開こうとすると、エラーが表示される	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出では、ターゲット アプリケーションごとにデータ ファイルが作成されます。エラー検出を開始する前に、ターゲット実行ファイルを含むフォルダへの書き込みアクセス権があることを確認する必要があります。</li> </ul>
エラー検出が完了しない、またはコールスタックにエラーがある	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出がシンボルを特定できなかったか、シンボルが古くなっています。Microsoft Symbol Server を有効にし、現在のファイルに一致するシンボルを取得します。そして、アプリケーションを再実行してください。</li> <li>• テスト中のアプリケーションで、マネージ コードとアンマネージ コードが混在して使用されています。2種類のモジュール間で発生したトランザクションが、コール スタックを正常に処理できません。</li> </ul>
Symbol Server での処理に時間がかかり過ぎる	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出が、実行ごとに、Microsoft Symbol Server からシンボルを取得することを試みています。現在のファイルに一致するシンボルを取得したら、Microsoft Symbol Server を無効にして、ローカルなシンボルを使用してアプリケーションを実行してください。</li> <li>• 一部のオペレーティング システムについては、シンボル パッケージをダウンロードし、永久的にインストールすることができます。詳細は、Microsoft のシンボル ダウンロード ページを参照してください。</li> </ul>

問題	対処法
COM オブジェクトの追跡（またはCOM コール レポート）が正常に機能していないように見える	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[モジュールとファイル]の設定を調べ、特定のモジュールについてイベントのレポートを無効に設定していないことを確認します。</li> <li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[抑制とフィルタ]の設定を調べ、特定のCOM 追跡イベントについてフィルタや抑制を設定していないことを確認します。</li> <li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[COM コール レポート]にある[すべてのインターフェイス]チェックボックスを使用して、エラー検出で複数のCOM インターフェイスを監視するように設定します。</li> </ul>
アプリケーションが開始しない、または開始してもすぐにクラッシュする	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[メモリの追跡]で、[解放時に無効データをフィルする]チェック ボックスをオフにします。アプリケーションで解放済みのメモリを参照している可能性があります。</li> <li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[コール バリデーション]で、[コール前に引数で指定されたバッファを規定値で埋める]チェックボックスをオフにします。</li> <li>• ユーザーが作成したアロケータがあるかどうかを調査します (...¥Data¥UserAllocators.dat ファイルを参照してください)。</li> <li>• システムに OS シンボルが存在する場合、そのシンボル ファイルに不具合がある可能性があります。</li> <li>• クラッシュのタイミングに関連がある場合は、エラー検出機能の一部を無効にし、もう一度、アプリケーションの実行を試してください。</li> </ul>
サービスが起動するとすぐにハングする サービスが起動するとすぐに終了する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 管理者権限でサービスを実行していることを確認します。</li> <li>• Windows NT のサービス コントロール マネージャによってサービスが終了されたことが原因である可能性があります。サービスの初期化ロジックの dwWait の値を大きくしてサービスを再実行します。</li> <li>• エラー検出に有効な作業フォルダがあることを確認します。[プログラム]メニューの[設定]にある[全般]の設定を使用して、作業フォルダを指定します。</li> </ul>
サービスが実行してしばらくたつと、突然終了する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• サービス状態を要求するコントロール メッセージへのサービスの応答が遅すぎる可能性があります。サービス状態の要求に応答する場合は、dwWait のタイムアウト値を大きくします。</li> <li>• エラー検出によってアプリケーションのメモリが解放時に無効データによってフィルされ、クラッシュすることもあります。[オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[メモリの追跡]機能を無効にします。これでクラッシュが解消したら、FinalCheck でサービスをインストールし、アプリケーションを再実行して、初期化されていないメモリ リファレンス、バッファ オーバーラン、およびダンダリング ポインタを探します。</li> </ul>

問題	対処法
サービスは正常に実行されるが、シャット ダウン時に突然終了する	<ul style="list-style-type: none"> <li>サービス コントロール マネージャからシャット ダウン要求を受け取ったときのサービスの応答時間が制限されています。アプリケーションのシャットダウン時には、エラー検出によって、メモリ リーク、リソース リーク、およびインターフェイス リークの検出や、割り当て済みのメモリ ブロックを再チェックすることによるメモリ オーバーランの検出などの数多くのチェックが実行されます。シャット ダウン要求に応答するために指定されている <code>dwWait</code> 値が小さすぎると、サービス コントロール マネージャによってサービスが中止されます。この場合は、<code>dwWait</code> 値を大きくします。</li> </ul>
エラー検出でサービスの分析に失敗する	<p>エラー検出でサービスの分析に失敗する場合があります。一般的な原因は、プロセスの監視に使用されている1つ（または複数）のディレクトリが、作成するプロセスに対して書き込み可能になっていないことです。以下のディレクトリは、書き込み可能にする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><code>TMP</code> と <code>TEMP</code> の環境変数は、プロセスに対して書き込み可能なフォルダを参照している必要があります。<code>LOCAL_SYSTEM</code> コンテキストを実行するようにサービスを構成した場合は、これらの環境変数をシステム全体に割り当てます。</li> <li>サービスには、<code>NLB</code> ファイル フォルダへの書き込みアクセス権が必要です。</li> <li>サービスには、作業フォルダへの書き込みアクセス権が必要となる場合があります。</li> </ul>
エラー検出を指定してアプリケーションを実行しようとすると、Visual Studio がクラッシュする	<p>以下に挙げる方法の少なくとも1つを使用して、クラッシュの原因を絞り込みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アプリケーション テスト コードのさまざまな場所にブレークポイントを設定する。</li> <li>エラー検出の設定を再構成し、いくつかのサブシステムやモジュールを無効にする。詳細については、オンライン ヘルプの「プログラム設定を変更する」を参照してください。</li> </ul>
タスク マネージャではメモリ使用量の増加を確認したが、エラー検出ではリークについて何も報告されない	<ul style="list-style-type: none"> <li><code>FinalCheck</code> でアプリケーションを完全にインストールしていることを確認します。</li> <li>[オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[全般]で、[イベントをログに記録]が有効になっていることを確認します。</li> <li>アプリケーション テスト モジュールが有効になっていることを確認します ([オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[モジュールとファイル]を使用)。</li> </ul>
マネージ C++ アプリケーションに対してエラー検出を実行したが、期待していたリークやエラーが報告されない	<ul style="list-style-type: none"> <li>エラー検出の既知の制限事項です。メモリ割り当てを調べ、適切なレポートが出力されるように、ネイティブ デバッガ（またはマネージ デバッガとネイティブ デバッガ）を使用していると考えられます。マネージ デバッガを使用している場合、メモリ割り当てとリソース割り当ては（アプリケーションではなく）<code>mscorewks.dll</code> の情報が使用され、結果としてアプリケーションの情報は無視されます。</li> </ul>

問題	対処法
ActiveCheckでメモリ リークが検出されず、FinalCheckで検出される	<ul style="list-style-type: none"> <li>FinalCheck でインストールメントすると、より堅牢なメモリ追跡を行うことができます。FinalCheckは範囲を認識し、エラー検出ではメモリ使用状況だけでなく各ポイントの追跡も可能になります。詳細については、『クイック リファレンス』の「ActiveCheck と FinalCheckによるエラー検出」を参照してください。</li> </ul>
エラー検出を指定して実行するとアプリケーションが失敗する（通常はメモリ追跡を有効にしている）	<ul style="list-style-type: none"> <li>[オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[メモリの追跡]で、[解放時に無効データをフィルする]チェック ボックスをオフにします。</li> <li>[オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[メモリの追跡]で、[保護バイトを有効にする]と[確保時にフィルする]のフィルパターンを入れ替えてみてください。</li> <li>不具合のある PDB ファイルを使用している可能性があります。<b>NMShared¥4.7</b> フォルダで、NMSYMDATA.DAT という名前のASCIIテキスト ファイルを作成します。このファイルには、不具合のあるPDBファイルに関連付けされたモジュール名を含めます。後ろに「,0x0」を付加します。以下に例を示します。 ADVAPI32.DLL,0x0</li> <li>Visual Studio MFCアプリケーション ウィザードを使って生成されたアプリケーションのデバッグ中に、メモリ追跡サブシステムのメモリ フィル機能を有効にした場合は、エラー検出によってアプリケーションがクラッシュする可能性があります。MFCでは、コンパイラが「最低限のデバッグ情報」を生成するあいまいなpragmaが設定されます。使用しているOSの構造体に余分なフィールドが追加されている場合は、エラー検出による構造体のサイズの計算時にデバッグ情報の中の誤ったサイズが使用されることによって、書き込み禁止メモリがフィルされる可能性があります。プロジェクトのC++ プリプロセッサ設定ページでプリプロセッサ定義にAFX_FULLTYPEINFOを追加して、ソリューションをリビルドします。</li> <li>NMSYMDATA.DAT ファイルを作成しても問題が解決されない場合は、モジュール全体を除外する必要があるかもしれません。アプリケーション モジュールを除外するには、ASCIIテキスト ファイルを作成し、EXCLUDEDMODULES.DAT という名前でDataフォルダに保存します。このフォルダは、エラー検出がインストールされた場所にあります。以下に例を示します。  &lt;InstallationRoot&gt;¥Data¥EXCLUDEDMODULES.DAT  除外するモジュール名を追加します。1行に1つのモジュール名を記述します。以下に例を示します。MYCUSTOMDRIVER.DLL</li> </ul>
Visual Studio に統合したエラー検出を使用してWebアプリケーションをデバッグできない	<ul style="list-style-type: none"> <li>Web アプリケーションのようなアプリケーションやサービスをデバッグするには、[プロセスを待機]オプションを使用します（「サービスを分析する」(39ページ)を参照してください）。このオプションは、エラー検出アプリケーション（BC.EXE）から利用できます。Visual Studio に統合したエラー検出を実行している場合は、このオプションは利用できません。</li> </ul>

問題	対処法
デバッグ対象のモジュールを System files フォルダに配置したが、System files フォルダが制限されているため、モジュールをデバッグできない。What can I do?	<ul style="list-style-type: none"> <li>• [オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[モジュールとファイル]を使用してモジュールを有効にすると、現在のプロジェクトに対してデバッグできます。</li> <li>• すべてのプロジェクトとソリューションに対してモジュールを有効にするには、エラー検出のインストール先である Data フォルダにある Unrestricted_modules.txt というファイルを編集します。以下に例を示します。</li> </ul> <p>&lt;InstallationRoot&gt;%Data% Unrestricted_modules.dat</p> <p>含めるモジュール名を追加します。1行に1つのモジュール名を記述します。以下に例を示します。MYCUSTOMDRIVER.DLL</p>
エラー検出で dllhost.exe や TestCon32.exe のエラーがレポートされる	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出で dllhost.exe や TestCon32.exe のエラーがレポートされないようにするには、チェックするモジュールのリストから該当する実行可能ファイルを除外します。</li> </ul>
COM コール レポートでオブジェクトやコンポーネントへのコールがログに記録されない	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出では、認識対象として指定された COM インターフェイスのメソッドのみが記録されます。エラー検出に ActiveX コントロールについて知らせるには、[オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[COM コール レポート]で、選択したモジュールに実装されたオブジェクトで[COM メソッド コールのレポートを有効にする]を選択します。</li> </ul>
エラー検出からオブジェクトまたはコンポーネントの COM インターフェイス リークがレポートされない	<ul style="list-style-type: none"> <li>• COM インターフェイス リーク情報を収集するには、[オプション]または[設定]ダイアログ ボックスの[COM オブジェクトの追跡]で、[COM オブジェクトの追跡を有効にする]を選択します。そして、監視する COM クラスを選択します。</li> <li>• 独自のオブジェクトを追跡するには、[COM オブジェクトの追跡]の設定の COM クラスのリストから、該当するクラスだけを選択します。選択するクラスがわからない場合は、[すべての COM クラス]を選択します。</li> </ul>
コンポーネントの実行を停止したあと、エラー検出がハングしたかのように長時間応答しない	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出は、dllhost.exe がタイムアウトし、プロセスを終了するまで待機します。dllhost.exe が終了すると、エラー検出ではメモリ リーク、リソース リーク、およびインターフェイス リークの最終的な検出が行われます。</li> </ul>
IIS が起動してすぐにハングする	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出でサービスをデバッグするには、管理者権限が必要です。管理者権限のないアカウントを使用すると、IIS は応答を停止するか、エラーで終了します。</li> </ul>
コマンドライン バッチ プロセス (VCBUILD.EXE を使用) を通して自動コンパイルしたエラー検出用のコードがインストールできない	<ul style="list-style-type: none"> <li>• コマンドラインでコンパイラを呼び出してコードをインストールするには、DevPartner を使ってインストールした NMVCBUILD バリエーションを使用する必要があります。NMVCBUILD によるコンパイル方法については、「nmvcbuild を使用してネイティブ C/C++ コードをインストールする」を参照してください。</li> </ul>
Windows Vista 上でエラー検出用のインストールメンテーションを使ってターゲットアプリケーションを構築しようとするとエラーが表示される	<ul style="list-style-type: none"> <li>• エラー検出では、ターゲット アプリケーションごとにデータ ファイルが作成されます。エラー検出を開始する前に、ターゲット実行ファイルを含むフォルダへの書き込みアクセス権があることを確認する必要があります。</li> </ul>

問題	対処法
エラー検出下でアプリケーションを実行すると、不正なデータまたは予期せぬ結果が発生する	<p>• コードに、未定義の評価順序に依存する式がないことを確認してください。評価順序が正しく定義されていないコードをインストールすると、不正なデータ、ハング、クラッシュなどの予期しない結果が生じることがあります。</p> <p>C/C++ 標準では、オブジェクトへの値の格納など、「副作用」がある場合の評価順が明確に定義されていません。たとえば、以下のステートメントの評価順序はあいまいです。i = ++i + 2;</p> <p>このステートメントには、変数 <i>i</i> に値を保存する部分が2か所ありますが、この言語ではそれらの実行順序が定義されていません。このようなコードをインストールした場合は、評価順序が固定ではないため、結果が予測できない可能性があります。</p>
混合モード (マネージ/アンマネージ) 環境でエラー検出から不正なリークとオーバーランが報告される	<p>• マネージ デバッガを使ってマネージ C++ アプリケーション上でエラー検出を実行している場合は、アプリケーションではなく、<b>mscorwks.dll</b> または <b>mscorsrv.dll</b> から取得されたメモリ割り当てとリソース割り当てが表示されるため、エラー検出では無視されます。混合コードまたはマネージ コード アプリケーション上でエラー検出を使用する場合は、以下の手順に従います。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 プロセスのデバッグに使用するバージョンの Visual Studio を開きます。</li> <li>2 DevPartner エラー検出スタンドアロン アプリケーションを起動します。</li> <li>3 エラー検出内でターゲット プロセスを開いて、<b>[プログラム]&gt;[実行]</b> を選択し、そのプロセスを実行します。</li> <li>4 <b>[ツール]&gt;[プロセスにアタッチ]</b> をクリックして、ターゲット プロセスにデバッガをアタッチします。</li> </ol> <p><b>メモ:</b> <b>[マネージ コード デバッグ]</b> (<b>[混合]</b> や <b>[自動]</b> ではありません) を指定して、デバッガでマネージ コードのブレークポイントが正確にヒットするようにします。</p> <p>この手順を使えば、マネージ コード内のブレークポイントを設定してヒットさせることができます。また、エラー検出で、メモリ割り当てとリソース割り当てが検出されます。</p>

## 付録 B

# 重要なエラー検出ファイル

### ファイルとその用途

セッション中の動作を制御したり定義したりするために、エラー検出で使用されるファイルを下の表に示します。この表には、ファイルの場所、名前、目的、およびそのファイルをユーザーが変更可能かどうか記載されています。

ファイル名とパス	用途
<code>&lt;Program Root&gt;%Data%ctisafe.dat</code>	ポインタの値を保存せずにポインタを受け取る既知の関数を指定します。MemTrackとFinalCheckでは、このファイルを使って安全な関数の追跡が行われます。この情報によって、ポインタが未知の関数に渡されたときのエラーのトリガーが回避されます。ある関数がこのファイルに書き込まれると、MemTrackとFinalCheckでは、その関数でポインタのコピーが保存されなかったと判断されます。必要に応じて関数を追加することができます。このリストからデフォルトの関数を削除する場合は、Micro Focus Customer Careにご相談ください。
<code>&lt;Program Root&gt;%Data%BCDefault.DPRul</code>	エラー検出によってロードされる抑制ファイルとフィルタ ファイルのデフォルト セットをリストします。 エラー検出内の抑制とフィルタの編集用ダイアログを使って、このリストに追加することができます。追加した情報は、現在のプロジェクト ディレクトリでのみ有効です。追加した情報をシステム全体で有効にするには、手動でファイルを編集して、追加する抑制ファイルまたはフィルタ ファイルへのフルパス名を指定します。
<code>&lt;Program Root&gt;%Data%*.DPF1t</code> <code>&lt;Program Root&gt;%Data%*.DPSup</code>	エラー検出で使用されるフィルタと抑制を定義します。 <code>.DPF1t</code> ファイルと <code>.DPSup</code> ファイルのそれぞれに、システム モジュール固有のフィルタと抑制が含まれています。 エラー検出の抑制とフィルタの編集用ダイアログを通して、抑制とフィルタを追加、変更、または削除します。これらのファイルは手動で編集しないでください。

ファイル名とパス	用途
<Program Root>%Data%\Unrestricted_modules.txt	システム ディレクトリに存在するかどうかに関係なく、無制限DLLにするモジュールを指定します。システム ディレクトリに存在するモジュールは、エラーの検査から除外するようにマークする必要があります。デフォルトで、 <b>Unrestricted_modules.txt</b> には、さまざまなバージョンのMFCモジュールが含まれています。 このファイルを手動で編集して、システム ディレクトリに存在する特定のモジュール名を追加すれば、エラー検出でそれらのモジュールのエラーが検査されます。
<Program Root>%Data%\UserAllocators.dat	カスタム アロケータを指定します。このファイルとエラー検出での使用方法については、 <a href="#">第4章、「ユーザーが作成したアロケータの使用」</a> を参照してください。
<Program Root>%ERptApi%\NMApiLib.*	エラー検出のユーザー呼び出し可能インターフェイスへのアクセスを提供します。 <b>NMApiLib.h</b> では、エラー検出に対するユーザー呼び出し可能インターフェイスが定義されます。このファイルは、 <b>NMApiLib.lib</b> をプロジェクトにリンクすることによって実装されます。ユーザー呼び出し可能インターフェイスの詳細については、 <a href="#">第3章、「複雑なアプリケーションの分析」</a> を参照してください。
<Program Root>%Data%\ExcludedModules.dat	(ユーザー作成ファイル) 除外するモジュールのリストが保存されています。モジュールは1行ごとにリストされます。以下に例を示します。 <b>MYCUSTOMDRIVER.DLL</b>
<Program Root>%DPSErrorDetection.xsd	セッション ファイル データをXMLにエクスポートするとき使用されるスキーマ情報が保存されています。このファイルは編集しないでください。
<NMSHared Root>%NMSymData.dat	(ユーザー作成ファイル) 不正なPDBファイルに関連付けられたモジュール名(後ろに「,0x0」が附加される)が保存されています。以下に例を示します。 <b>ADVAPI32.DLL,0x0</b>
<Program Root>%DPSErrorDetection.xsd	XML機能へのデータ エクスポートで使用されるスキーマを指定します。
キー	
<Program Root> = C:%Program Files%\Micro Focus%\DevPartner Studio%\BoundsChecker	
<NMSHared Root> = C:%Program Files%\Common Files%\Micro Focus%\NMSHared%	
メモ: 64ビットバージョンのWindowsへのインストールでは、DevPartner Studioは以下の場所にあります。 <b>%Program Files (x86)%\Micro Focus%\DevPartner Studio%</b> と <b>%Program Files (x86)%\Common Files%\Micro Focus%</b>	

# 索引

## A

ActiveCheck 49  
ActiveX 39  
    コンポーネント 33  
    デバッグ コントロール 37

## B

BCDefault.DPRul 93

## C

CLR 分析 25  
COM  
    コンポーネント 33  
    サーバー 39  
    使用法 17  
CTISafe.dat 93

## D

dwWait 40

## E

ExcludedModules.dat 94

## F

FinalCheck 49

## I

IIS 34  
    プロセス 45

ISAPI フィルタ 20, 33, 37, 45, 46

## N

NMApiLib 94  
NMSymData.dat 94  
NMVCBUILD 14

## P

P/Invoke 24, 29  
    相互運用性の監視 25

## S

StartEvtReporting 36  
StopEvtReporting 36

## U

Unrestricted\_modules.txt 94  
UserAllocators.dat 94

## V

VCBUILD 14

## W

Windows  
    サービス 33, 39  
    サービス、デバッグ 37  
    サービス コントロール マネージャ 41, 88

## あ

アプリケーション

- シングル スレッド 75
- トランザクションの 38
- 複雑な 33
- マルチスレッド 31, 75

## い

インターフェイス

- コマンドライン 12
- リーク 26

## か

管理者権限 40, 46, 91

## く

クリティカル セクション、同期オブジェクト 76

## こ

構成ファイル管理 20  
コール パラメータのデータ表示の深さ 28  
コール バリデーション 23, 25  
コマンドライン 12

## さ

サードパーティ製ソフトウェア 12, 26, 35  
サービス、デバッグ 34  
サービス コントロール ロジック 40

## し

実行可能ファイル

dllhost.exe 43

重要なファイル

- BCDefault.DPRul 93
- CTISafe.dat 93
- ExcludedModules.dat 94
- NMApiLib 94
- NMSymData.dat 94

Unrestricted\_modules.txt 94

UserAllocators.dat 94

条件付きコード 35

シングル スレッド アプリケーション 75

## す

スレッド、定義 75

## せ

設定 20, 21

精密化 12

デフォルト 12

潜在的なデッドロック 77

## た

ダングリング ポインタ 32

## て

テスト コンテナ 38

デッドロック 77

潜在的な 77

デフォルト設定 23

## と

トラブルシューティング 83

トランザクションのアプリケーション 38

## ね

ネイティブ コード 19, 24, 25

ネイティブ コードをインストールする 14

## ふ

ファイル拡張子

.DPFflt 93

.DPSup 93

.DPRul 93

フィルタ 35  
複雑なアプリケーション 33  
  デバッグ 38  
  分析する 26

## ほ

ポインタ、ダンダリング 32  
保護バイト 18

## ま

マネージコード 19, 24, 25  
マルチスレッドアプリケーション 31, 75  
マルチプロセッサアプリケーションサーバー 31

## む

無効データのフィル、メモリに対する 18, 31

## め

メモリ  
  オーバーラン 24  
  トラッカ 20  
  無効データのフィル 18  
  リーク 26

## も

[モジュール]タブ 27  
モジュールとファイル 20, 35, 37  
  および複雑なアプリケーション 27  
  およびリバースエンジニアリング 30

## よ

抑制 35

## り

リソーストラッカ 20  
リソースリーク 20, 26

## ろ

ログファイル 28

## わ

ワーカー スレッド 40

